

# 佐賀の 野草

下

8月～11月編  
貞松光男著



佐賀新聞社

# 佐賀の野草 (下)

8月～11月編

貞松光男著

佐賀新聞社

## 序にかえて

私の植物の師は、貴重種や個体数が少ない種は学校の教材用は別として、個人には、標本作製用にも採集を許さなかった。教材用も1本に限るよう指導された。尊敬する師の教えは今でも私のなかに生きていて、標本を残さないまま局地的に絶滅してしまった植物の種類が多いのが気残り、かえって悔やまれることすらある。どうしても専門家の同定を必要とする場合は、1本だけ採集し、その一部を切りはずし手元に残すようにすることもある。これは植物の専門家はいざ知らず、アマチュアは当然の気くばりとしてだれでもしていることである。

その点、写真は何枚撮っても気は楽だ。写真の撮りはじめは美しい植物、珍しい植物が中心になっていたが、やがて県内の全植物の写真を撮ってやろうという気になった。こうなると、行き当たりばったりとはいかなくなり、目的の植物を撮るために何年も通うということになる。首尾よく、良い被写体にめぐり合っていると喜んでいたら、出来た写真がピンボケだったり、泣きたい気持ちにさせられたことが何度もある。

写真として、美しいものにしたい気は当然あるが、それよりも、種の特徴が明確に表れるような構図をねらった。しかし、それを1枚の写真におさめようとするには限界がある。本書のように1種1枚という制約のなかで、どの1枚を選ぶか腐心したのだが、植物図鑑としての機能が果たしているか気がかりである。

ところで、上巻(2~7月開花種を収載)と比較して気付いたことだが、8~11月開花種を収載する本巻(下巻)には方言を有する植物が少ないことだった。これは、子供の遊び、山菜、祭祀、生活の諸道具など、人が身近なものとして人と何らかのかかわりをもつ植物が少ないことを意味するものであろう。確かに、美しい花の植物は多いように思うが、これすらそれなりの用がなければ、人にとって真に魅力あるものではなかったのではないかと。

こうしてみると、現在、自然とのかかわりが次第に薄れているなかでは、植物の名前もその意味もますます形骸化してしまい、単なる識別用の記号に過ぎなくなってしまうのではないだろうか。

平成2年10月1日

(著者記す)



### 目次

序にかえて	1
凡例	2
8月の野草	3
9月の野草	53
10、11月の野草	127
科別分類索引(上巻)	200
科別分類索引(下巻)	204
50音順索引	208
著者略歴	222

## 凡 例

1. 本書には佐賀県に自生する草本植物のうち、夏から晩秋にかけて開花する257種を収録した。ただし、植物の利用部位や類似種との関係で開花期にこだわっていないものもある。
2. 写真の配列は開花期（一部については果期）を中心に8月、9月、10-11月に分けた。ただし、開花期は場所や年次によって変動し、また種によって開花時期に長短があるため、一応の目安としていただきたい。写真の撮影月と配列月とが合致していないものもあるが、これは撮影月が平常からはずれているとみていただきたい。
3. 生育地はそれぞれの植物が生育している立地や環境条件を記しているが、これも大まかな傾向を示している。
4. 産地については分布が局在している場合だけその地名なり山地名を記した。生育程度の多少は生育密度と生育地の面積を勘案して示した。
5. 方言はわかっているものについて、多数ある場合は代表的なものだけを記した。方言は場所によって異なるが紙面の都合で呼称地名を省略した。なお、本文中でとり上げた方言は〔方言〕の項にはあげなかった。
6. 類似種は写真がないもので間違いやすいものをあげたが、これはあくまでも主観的なものなので詳しくは他の参考書(例えば馬場胤義編、佐賀県植物目録)をみて欲しい。



8月の

野草



ヒメムカシヨモギ (キク科)



1989. 8. 11 鎮西町

外来雑草の猛威ふりは、今ではセイトカアワダチソウに代表されようが、明治時代はさぞかしヒメムカシヨモギであつたに違いない。その証拠（ないし）に明治草、御維新草（しんそう）の別名がある。また、鉄道草（てつどうそう）は、鉄道の敷設に伴い線路沿いに広がっていったことを示している。過疎地の廃屋の前庭に、黒くなって立ち枯れているのを見るとやりきれない。万葉時代に、ヤエムグラ茂れるやどのさびしさ、と詠まれたが、そのころは家に人が住んでいたのに、ヒメムカシヨモギが茂る家には人が住んでいないのである。花期 8~10月 生育地 荒地 産地 各地、北米原産 方言 トーボシ 類似種 ケナシヒメムカシヨモギ

オオアレチノギク (キク科)



1989. 8. 11 鎮西町

花期 8~10月 生育地 原野、路傍 産地 各地、南米原産

アレチノギク (キク科)



1989. 2. 25 小城町

花期 4~9月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在、南米原産



1986. 7. 29 厳木町

キキョウ (キキョウ科)

やや高いところの草原に生える。そんなところの道端近くに咲いているのを見るとついでにうれしくなる。よくもまあご無事で、というわけだ。しかし、明日の生命はわからない。今日までの無事を祝ってあげたいわけである。だれだって、こんな美しい花を見たら、手折りたくなる気持ちを抑え切れないのではなからうか。こうして、この秋の七草も自然から少しずつ姿を消していつているようだ。キキョウの仲間は薄青紫色の花が多い。これも人の気をひく要因の一つとなっているようである。花期 8～9月 生育地 草原 産地 各地散在



1989. 8. 17 鹿島市

イワタバコ (イワタバコ科)

もう随分前になるが、冬の植物探訪を試みた時のこと。雪が残り、静かな日、いくつかの珍奇種がある岩場にとりついてみると、ヤマノイモのムカゴの表面にしわをたくさん刻んだような、小塊がへばりついているのを見た。不思議に思い、持ち帰って観察していると、しわが徐々に伸びはじめ、やがて光沢あるみずみずしい葉になった。イワタバコだった。愛きょうのある小諸から、タバコの葉に似た、柔らかい葉と上品な花が生まれるのかと思うと、ちょっとおかしかった。花期 8月 生育地 岩壁 産地 県内山地散在 方言 イワチシャ

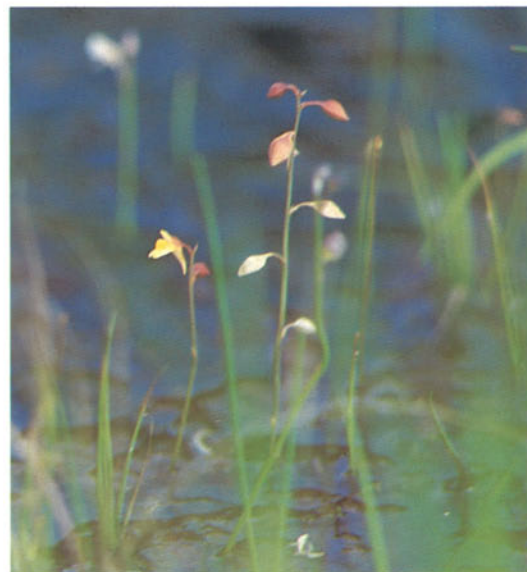


1985. 8. 23 蔵木町

**ホザキノミミカキグサ (タヌキモ科)**

湿地とはいっても、冠水するところではなく、草木が生い茂っているところでもない。土があらわれ、そこに太陽の光がとどくようなところに、ミミカキグサの仲間が生える。そこまでわかっていても、花がないと探し出せない。地上部には、微少な葉がみられるが、小さ過ぎて気付かない場合が多い。まして、食虫植物である証拠は、掘りあげてよほど注意してみないと、捕虫胞(囊)を見落としてしまう。こうしてみると、緑色植物で自活できるのだから、彼らにとって虫を食べるといのは、趣味の領域なのだろうか。花期 8月 生育地 湿地 産地 県中部一東部にやや稀

**ミミカキグサ (タヌキモ科)**



1985・8・23 蔵木町

花期 8月 生育地 湿地 産地 各地散在

**ムラサキミミカキグサ (タヌキモ科)**



1985・8・23 蔵木町

花期 8月 9月 生育地 湿地 産地 各地散在



1989, 8. 13 富士町

車が走れるような山道の側溝に、この花が乗り出すように咲いているのによく出くわす。車の随伴植物みたいだから、クルマバナというのではないかと、相当にうがった意見を言う人がいた。クルマバナは、花が咲いてはじめて気付かれる植物といってよい。側溝では特に目立つ。生態的

クルマバナ (シソ科)

特徴をとらえていないと、前記の意見はでないだろう。本当は、花が茎に車輪状につくからだが、そんなことはとっくに知ったうえでの言葉遊びだったのだろう。こんなことも植物好き同士の楽しみの一つである。花期 8月 生育地 原野 産地 各地散在

ニガクサ (シソ科)

花期 7~9月 生育地 山野 産地 各地散在 類似種 ツルニガクサ



1985, 7. 22 相知町



▲ 1986, 8. 16 敵木町

カワミドリ (シソ科)

花期 8月 生育地 山地 産地 各地散在





1986. 9. 6 八幡岳

### ネナシカズラ (ヒルガオ科)

根無し蔓<sup>かずら</sup>の意。葉緑素がなく葉もない。針金状のつるだけで、これに小さな花がかたまつてつく。寄生植物ということはすぐにわかるが、ある時は白黄色のつるばかりがたくさんによれていて、寄主が見えない場合がある。自分たち同士で栄養の交換でもしているのだろうか。一年生植物であれだけの花をつけるので、種子が落ちて毎年同じところに生えるかという、必ずしもそうではない。種子は発芽すると根を出す。つるが伸び、寄主植物にまきつくと根がなくなる。根っからの根無し草ではないのである。花期 8～9月 生育地 路傍、原野 産地 各地散在

### ハマネナシカズラ (ヒルガオ科)



1989. 7. 30 鎮西町

花期 8月 生育地 海浜 (ハマゴウに寄生) 産地 鎮西町 (波戸岬)

### アメリカネナシカズラ (ヒルガオ科)



1989. 9. 8 鎮西町

花期 7～9月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在、北米原産



1985. 9. 3 鹿島市

マルバルコウ (ヒルガオ科)

ヒルガオ科には外来種が多い。アサガオにしても、奈良時代末期に中国からもたらされたと考えられている。これが、江戸時代における草花趣味の世界の最高傑作とされる変化アサガオを作りあげた。そういう時代を反映して、このマルバルコウは嘉永年間 (1848~1854) にもたらされたという。アサガオに比べると、花は小さいが花色が朱赤色で雅すべきものがある。観賞用として導入されたが、今は野生化して栽培をみない。特に戦後、ヒルガオ科の植物が帰化していて、本県でも10種弱におよぶが、これらは意識的に導入されたものではない。花期 9~10月 生育地 路傍 産地 各地散在、熱帯アメリカ原産

マルバアサガオ (ヒルガオ科)



1989. 10. 1 伊万里市

花期 9月 生育地 原野 産地 各地稀産、熱帯アメリカ原産

アメリカアサガオ (ヒルガオ科)



1989. 10. 1 伊万里市

花期 9月 生育地 原野 産地 各地稀産、熱帯アメリカ原産



1987. 7. 佐賀市

ドクゼリ (セリ科)

佐賀市近郊のクリークのホテイアオイやヨシなどが冬枯れするころ、唯一ドクゼリだけが猛々しい緑を保っている。しかし、それも厳寒期になると、さすがに黄色く枯れが目立ってくる。そのころになると、本物のセリが緑を増し少しずつ上に伸びはじめる。ドクゼリは最も毒性の強い植物の一つであり、間違っても口に入れてはいけない。セリよりも水深が深いところに生え、セリよりもはるかに壮大である。花のころは、クリークもにぎやかなのであまり目立たない。どういいうわけか、佐賀市近郊にしかみない。花期 8～9月 生育地 池沼 産地 佐賀市 やや稀

ツクシトウキ (セリ科)



1988・7・7 黒髪山

花期 7～8月 生育地 山地 産地 県南部に散在

マツバゼリ (セリ科)



1989. 7. 29 佐賀市

花期 7～9月 生育地 原野、路傍 産地 各地、南米原産

オトギリソウ  
(オトギリソウ科)

この植物には悲恋物語がか  
らんでいる。かつて、ある鷹  
匠の家では、この植物が鷹の  
病気に効くことを知って、秘  
伝としていたが、弟がライバ  
ルの鷹匠の娘と恋に落ち、秘  
伝をもらってしまったため、  
兄が弟を成敗したことから弟  
切草と名付けられたという。  
オトギリソウの仲間にはトモエ  
ソウがある。花の形が卍状に  
なるからだか、この花に出合  
いたくて何年も通っている山  
がある。ようやく探し出した  
時は果実になっていた。こう  
して思いを果たせないでいる  
植物が結構多い。花期 8～9  
月 生育地 原野、林縁 産地  
各地



1989. 7. 31 鎮西町

ヒメオトギリ  
(オトギリソウ科)



1985・9・29 巖木町

花期 8～10月 生育地 原野湿地 産地 各地

アゼオトギリ  
(オトギリソウ科)



1990. 7. 22 佐賀市

花期 7～9月 生育地 湿地 産地 各地散在 類似種 ナガサ  
キオトギリ、サワオトギリ



1983. 7 春振山

### オカトラノオ (サクラソウ科)

サクラソウ科と聞いただけで、何か美しい花の植物を連想する。そんな先入観で判断している場合が、結構多いようだ。オカトラノオが、美しくないというわけではない。やぼったい環境でやぼったい葉をつける。花穂が虎の尾状になる。サクラソウ科のオカトラノオですと紹介すると、花色がピンクでないのが残念そうだけど、花穂に目を止めて、それでこんなに美しいのですねという。いくらかでも、自分のイメージにふさわしいものにデッチあげようとする人間心理を、植物観察会の折にも知らされるのである。花期 8月 生育地 山地、原野 産地 各地

### キンミズヒキ (バラ科)



1989. 9. 9 鎮西町

原野にも、薄暗い古い山道の両側にも生える。人のおいがとどく範囲に分布する人里植物の一つ。人里植物の例にもれず、単生することはない。山道では長くつながって群生する。キンミズヒキ(金水引)のきれいな名前に似ず、花がなければ目をひかない、単なる野の草である。

黄色の花をつけた花穂をどうみるか、それぞれの観賞者の印象にまかせよう。種子は発達した萼がくに包まれるが、萼には多数の鈎状毛こうじょうもうがあり、これで他物にくっついて分布域を拡大する。花期 8~9月 生育地 路傍、原野 産地 各地



1989. 9. 27 加部島

### ニシキソウ (トウダイグサ科)

類品のコニシキソウは、明治20年ごろに北米から帰化したとされているが、今ではニシキソウよりはるかに個体数が多い。外来種が、土着種を追い出すという現象は、よくあることではある。ただ詳しくいえば、ニシキソウのコニシキソウ渡来以前の生育密度は、よくわからないし、ニシキソウの生育場所が、コニシキ

ソウに入れ替わったのかどうかもわからない。近年になって、オオニシキソウ、シマニシキソウ、イリオモテニシキソウが渡来しているが、これらは今のところ他種の生活場所を侵すような傾向はみられない。花期 8～9月 生育地 畑地 産地 各地 散在

### コニシキソウ (トウダイグサ科)



1989. 9. 9 鎮西町

花期 7～9月 生育地 原野、庭 産地 各地、北米原産

### オオニシキソウ (トウダイグサ科)



1989. 8. 13 加部島

花期 7～9月 生育地 原野、鉄道沿線 産地 各地散在、北米原産

コミカンソウ (トウダイグサ科)



1986. 8. 30 小城町

小さいのに樹のような草である。主幹があって、それから枝が出、葉がついている。果実は枝の下にぶら下がっている。こんな格好に描かれた樹を何かの画集でみた記憶がある。私自身、子供のころミカンの樹をこんなに描いたように覚えている。ミカンの名前がついているが、小さな果実には横しわがあり、これが見方によっては、ミカンの果皮の油点にみえる。果実の色も赤褐色ではあるが、ミカンに似ているといえなくもない。とはいえ、コミカンソウの名は果実だけでなく全体がミカンの樹に似ていることによるのだろう。花期 9月 生育地 畑地 産地 各地

ヒメミカンソウ (トウダイグサ科)



1990. 7. 29 唐津市

花期 8~9月 生育地 畑、荒地 産地 各地

エノキグサ (トウダイグサ科)



1989. 9. 30 鎮西町

花期 9月 生育地 畑、荒地 産地 各地



1986. 8. 30 富士町

### フシグロセンノウ (ナデシコ科)

植物好きの良き先輩から、見せたい花があるとの誘いの電話が入った。今では悠々自適、県内の山野を自分の庭みたい歩き回っている人である。案内されたところは、道路からわずかに入った小さな草むらで、朱赤色の花が数輪咲いていた。これがフシグロセンノウだった。あまりの美しさに見とれていると、近くでゲートボールをしていた老人達が寄ってきて共に感嘆してくれた。その後、ほとんど毎年欠かさず見に行っているが、美しい花をみたいというよりも、今年も株が残っているだろうかと思う気持ちが強い。花期 9月 生育地 山地 産地 浜玉町、富士町に稀



1985. 8. 23 殿木町

### カワラナデシコ (ナデシコ科)

別名ナデシコ、ヤマトナデシコ。ヤマトナデシコとは勇ましい名前であるが、類品のカラ(唐)ナデシコに対比したもの。秋の七草の一つでもある。春の七草が食用になるものであるのに対し、秋の七草は観賞用で占められる。そのなかでも、繊細な花弁と色彩、線形の葉の組み合わせは最も美しい。名前から河原に多いように思われるが、山野のあちこちに無造作に生えていて、意外性を感じさせる。何度出合ってもこんなところに、どうしてここにと思わせるような気品がある。花期 8月 生育地 原野、林縁 産地 各地散在 方言 ナデシコ





1989. 7. 13 虹の松原

### オカヒジキ (アカザ科)

陸に生えるヒジキの意。ヒジキは干満線に近いところに生える海藻。オカヒジキは、海浜の砂地に生え、形状がヒジキに似て食用にもなる。一度食べてみようと思ひ砂浜を探し歩いたけれど、そんなにみつかるものでもない。たまたまみつかったも、葉が刺のように固くなっており、と

ても歯がたつようなものではなかった。しかし、花とも見えぬ小さな花が種子をつけたのを蒔けば、きわめてよく育つ。これをみるにつけ自然の厳しさを痛感させられる。味はあっさりして歯ざわりがよい。花期 8～9月 生育地 海浜砂地 産地 玄海側砂地に散在



1985. 8. 9 小城町

### ヤブガラシ (ブドウ科)

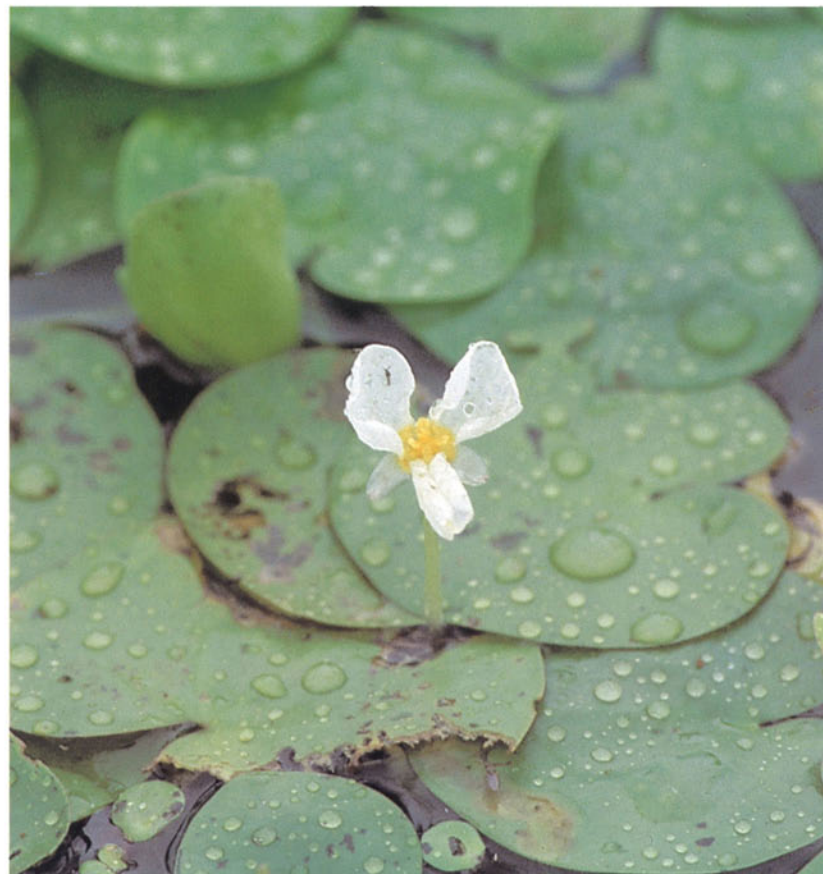
別名ピンボウカズラ。他の植物の上を覆い尽くして茂るのでヤブガラシ。貧乏して、庭に手がまわらなくなり荒れると、この草がはびこるので、ピンボウカズラ。最近では中流生活者であふれ、貧乏とは縁が切れ、草が茂るほどの庭もないため、ピンボウカズラとも縁切れである。ヤブガラシと言っけれど、庭木類を痛めつけるので、ヤブツクリではないかと屁理屈屋はいう。つるをひく植物の生活形態であり、つる(茎)の大きさで大木を覆ったり、草同士がからまったりする。ヤブガラシはちょうど目線の高さだ。花期 8月 生育地 原野、林縁 産地 各地方言 ゴイシ

ウマノスズクサ (ウマノスズクサ科)



1985. 8. 23 小坡町

この野草の自生地は意外と知られていない。たまたま私の家の前にあって、この葉を食べている赤黒斑のいも虫を見た記憶が残っている。後にこのいも虫は、じゃこうあげはの幼虫であることを知った。よく見ると、花の形がこのいも虫に似ているところも面白い。蝶がどのようにして食草を探し出すのか知らないが、他の雑草に埋もれている場合はさすがに食痕がない。そうでなくても、最近、じゃこうあげはも飛んでいるのをあまり見かけなくなったような気がする。花期 7～8月 生育地 原野 産地 各地稀



1989. 9. 5 白石町

トチカガミ (トチカガミ科)

佐賀平野のクリークの水面を覆う植物も様変わりしているように思う。ホテイアオイ、オオフサモ、ホザキノフサモ、オオカナダモなどの外来水生植物がはびこり、ヒシやトチカガミの勢力が弱まっている。トチカガミは本来、葉が水面に浮いていて、増えだすと、密生して葉が空中にせり出すようになる。そんな情景をみるのが最近少なくなった。佐賀方言のガメンシュブタケは、葉の形がクリークに多いスッポン(ガメ)に似て、葉がせり上がるのをキノコ(タケ)に見立てたものというのだが。花期 8～10月 生育地 池沼 産地 各地散在 方言 ドーガメバス他多数



1989. 9. 7 鎮西町

ヤマノイモ (ヤマノイモ科)

ヤマイモ掘りをしたいという、私のたっの希望をいれて山村の友人は、村に一軒しか残っていない鍛冶屋にヤマイモ掘り用の特殊な道具をこしらえてもらい、案内してくれた。新つるが伸び出した、時期はずれの6月であったが、古いものは残っていた。できるだけ太いつるを探して掘ろうとするのだが、結果は無残。1本を掘り上げる前に息が切れ、あえいでいるのに相手は3本掘り上げている。気があせると、途中からいくつにも折れてしまう。小さいのをねらえばよかったと考えついたのは家に帰ってからだった。花期 8~9月 生育地 山野 産地 各地 方言 ヤマイモ

カエデドコロ (ヤマノイモ科)



1989. 8. 17 鹿島市

花期 8月 生育地 山野 産地 各地 方言 インヤマイモ

オニドコロ (ヤマノイモ科)



1986・7・27 小城町

花期 7~8月 生育地 山野 産地 各地 方言 トコロ

オオキツネノカミソリ (ヒガンバナ科)



1985. 8 多良岳

多良岳が原産地で、牧野富太郎の命名による。現在は関東以西で分布が知られている。キツネノカミソリとは、葉が刀状にとがっているのを見立てたもので、近ごろの安全カミソリしか知らない人は想像できないだろう。春、オオキツネノカミソリの大群落のなかを歩いていると、落

葉を貫いて伸び出している葉をよくみかける。この切れ味の鋭さからもカミソリを連想したのではないかと、一人その発見を楽しんだものだ。広葉樹林の林床一面に咲いた花を見た人の感想をききたい。**花期** 8月 **生育地** 山地樹下 **産地** 多良岳、脊振山、八幡岳

シュロソウ (ユリ科)



1985. 8. 23 蔵木町

こういうのを黒い花と言うのだろう。紫色の濃い花だ。現実には存在しない黒い花に限りなく近い花を探索、もしくは作出する努力を人は重ねているなかで、シュロソウは人の目から逃れてきた。これは、クロユリのように花の特徴が名前になっていないこととも関係する。シュロとは、ヤシ科の植物で、葉鞘部にある発達した繊維が強じんため、綱等にされシュロ縄として広く愛用された。これと似たものが、シュロソウの茎の基部を巻いている。かつては、シュロについて説明を加える必要はなかったのだが。**花期** 8~9月 **生育地** 山地 **産地** 県東部に散在

ヤマホトトギス (ユリ科)



1986. 7. 19 三瀬村

ホトトギスは最近よく賞美され、庭に植えられることが多い。ホトトギスの仲間の野生種は多く、黄花、ちゃぼもあるが、庭にはホトトギスだけが植えられているようだ。多くの野生種は、生育環境に対する適応性の幅が狭いのだろう。本県の山でみられるのは、ほとんどがヤマホトトギスである。低い山から高い山まで分布する。ホトトギスに比べ、花はやや小型で花数も少なく、花色は淡い。花は上向きに咲いてもアピール度が欠けるようだ。ホトトギスは、花卉の斑点を鳥のほととぎすの胸斑に見立てたものという。花期 8~9月 生育地 山地 産地 各地散在

ノカンゾウ (ユリ科)



1983. 8. 13 小城町

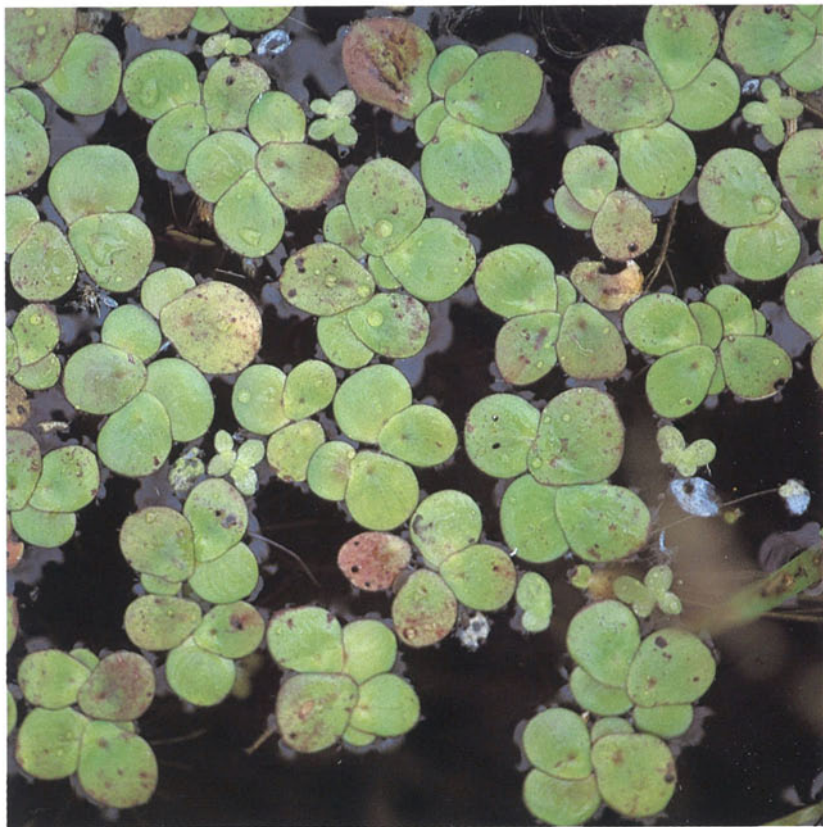
花期 8月 生育地 原野、溝のふち 産地 県中一西部に散在 方言 モトジロ

コバギボウシ (ユリ科)



1989. 8. 22 七山村

コ 花期 8月 生育地 山野の湿地 産地 各地 方言 ミズオーバ

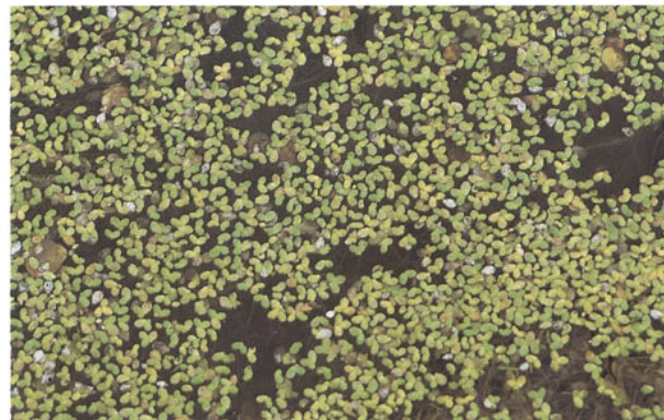


1990. 7. 6 相知町

### ウキクサ (ウキクサ科)

クリークは流れが少ない。流れがあると、根が地についてない浮草稼業のウキクサ類にとっては具合が悪い。そういう点から、水田とかクリークはウキクサ類にとっては好適な生活場所ということになる。とはいえ、そこでも流れが全くないことはなく、風でも吹くと隅に吹きたまる。佐賀ではウキクサ類をヤーと呼ぶ。ヤーとは、埃(アイ)の転化と考えられるが、本当に単なるゴミみたいなものなのだろうか。ウキクサ類の名譽のために付け加えると、広い地区で鵜の餌として賞用されていた。花期 8月 生育地 水田、池沼 産地 各地 方言 ヤー、エー

### アオウキクサ (ウキクサ科)



1988. 11. 2 牛津町

花期 8~9月 生育地 水田、沼、溝 産地 各地 方言 アオヤー、ヤー

### フサモ (アリノトウグサ科)



1989. 8. 22 七山村

花期 8月 生育地 池沼 産地 七山村に稀産

カヤツリグサ (カヤツリグサ科)



1984. 10. 23 小城町

名前は植物名にしろ、意味をもたせて名付けられているはずだ。しかし、現代人にはその意味が解せなくなった植物名も多い。カヤツリグサ(蚊帳吊り草)、一名マスクサ(拵草)は蚊帳や拵が日常生活から姿を消しているので、理解できない人が多いだろう。まして、なぜこの植物にそんな名前がつけられたかとなるとなおさらだ。自然との触れ合いとは、単に自然の中に身をおくことではない。積極的に体をぶっつけ、それが具備した特性を発見することにあるのではないだろうか。花期 9月 生育地 空き地、畑 産地 各地 方言 カヤツイグサ

コゴメガヤツリ (カヤツリグサ科)



1985. 8. 11 多久市

花期 8～9月 生育地 原野 産地 各地

クグガヤツリ (カヤツリグサ科)



1989. 7. 29 佐賀市

花期 7～8月 生育地 田野、路傍 産地 各地



1985. 8. 16 多久市

ヒデリコ (カヤツリグサ科)

田んぼの畦草の種類は、裏作のころとイネが生育しているころとはかなり異なる。もちろん、時期が違うので、植物の種類が違って当たり前であるが、裏作のころは比較的乾いたところに生える草、水を張ったイネ作のころは湿ったところに生える草と、生態型の違いが加わる。カヤツリグサ科の植物は、それらの両方の生態型に適応した種が分化している。ヒデリコは、後者に適応した種であり、畦畔雑草として定着している。だから干ばつ時には、からきしだめかという、そうではなく平然としているのが日照子の由来である。花期 9月 生育地 原野、畦畔 産地 各地

ホタルイ (カヤツリグサ科)



1989. 8. 19 富士町

ヤマイ (カヤツリグサ科)



1989. 8. 19 富士町

花期 8～9月  
ヒメホタルイ  
生育地 湿地  
産地 各地  
散在  
類似種

花期 8～10月  
生育地 湿地  
産地 各地





1984. 10. 23 小城町

ヒメクグ (カヤツリグサ科)

水田の畦畔<sup>けいばん</sup>や道路に好んで生える。これが畦<sup>あぜ</sup>に生えると、取り除くべきかどうか考えてしまう。取り除こうとすると、土がついてきて、畦<sup>あぜ</sup>がくずれてしまうからだ。背丈は低いので、イネ作りに邪魔をしないのではないかと考えるが、日本には、上農は草をみずして草をとる、という格言があって、草を生やしているのは惰農とみなされた。しかし、道路に生えると、道路の補強に役立っているはずだ。根茎とひげ根を張りめぐらし路肩のくずれを防いでいる。全草に特殊な芳香があるので、においで判別できる。花期 9月 生育地 原野、畦畔の湿地 産地 各地

タマガヤツリ (カヤツリグサ科)



1989. 9. 10 小城町

花期 8~10月 生育地 湿地 産地 各地散在

カンガレイ (カヤツリグサ科)



1986. 9. 23 東脊振村

花期 8~10月 生育地 沼沢地 産地 各地散在



1989. 9. 5 白石町

キシウスズメノヒエ (イネ科)

外来のスズメノヒエの仲間が目立つようになった。路傍ではシマスズメノヒエ、アメリカスズメノヒエ、水湿地ではこのキシウスズメノヒエである。本種は35年くらい前、佐賀市内で最初に気付かれたが今ではクリークを兩岸から覆っている。場所によっては、あたかも浮生植物のように水面全体を覆っている。熱帯アジア、アメリカ大陸原産で、大正末期に紀州(和歌山県)で採集されており、徐々に広がって、現在では関東以西で普通にみられる。このように、最初から勢いよく繁殖したものではないらしい。花期 8~10月 生育地 水湿地 産地 各地散在、熱帯アジア、北、中米原産

ナルコビエ (イネ科)



1985・9・21 小城町

花期 8~10月 生育地 原野 産地 各地散在

スズメノヒエ (イネ科)



1989・8・29 作礼山

花期 8~10月 生育地 原野 産地 各地散在

サギソウ (ラン科)



1985. 8. 23 七山村

人は白色に魅かれるようだ。白色は無垢、無欲を意味し、けがれなさを美しいと感じるのだろう。植物も白色の花は大事にされる。サギソウの花は白色のうえに、細工が凝っている。小振りである。自生地では群生しているが、その様がまた人の情感を揺さぶる。これらがサギソウにとって受難であった。人は無垢なるもの、美しいものを手に入れようと私欲を出す。サギソウの自生地は今では檜原湿原が有名になったが、かつては神埼、三田川等の平地の湿地にも普通にみられていた。花期 8月 生育地 湿地 産地 東脊振村、富士町、巖木町、七山村

シユスラン (ラン科)



1985・8・30 経ヶ岳

花期 8月9月 生育地 山地 産地 九千部山、多良岳等に稀

ミヤマウズラ (ラン科)



1986・8・17 石谷山

花期 8月9月 生育地 山地 産地 各地散在



1987. 10. 11 小城町

### ホテアオイ (ミズアオイ科)

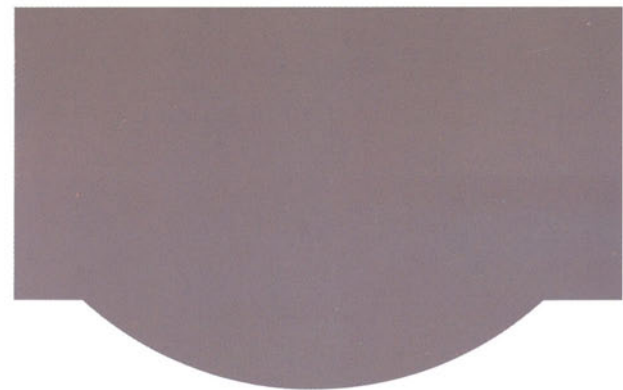
ホテアオイの強じんな生命力、繁殖力は知る人ぞ知る。熱帯アメリカの原産だけに、冬の間は激減するが、絶滅することはない。むしろその後の回復力に驚かされる。富栄養水だと横に広がらずに、立錫の余地がないほどに上に伸びあがる。それで、当初は観賞用として導入されたのが、今では水路の大害草になっている。いつごろから佐賀のクリークで繁殖しだしたのか、それを知る手掛かりとして、北原白秋が郷里柳川風景にウオタア・ヒアシンス（ホテアオイのこと）と詠んだ明治後期の作品がある。花期 8～9月 生育地 池沼 産地 各地散在  
方言 タイワンモガラ、ミズラン

Handwriting practice area consisting of 20 horizontal dashed lines.



9月の

野草





1989. 9. 9 鎮西町

イヌキクイモ (キク科)

最近分布が広がっているのではないかと、荒地に目立つようになった。もともと、サトイモ状の塊茎<sup>かいかい</sup>を利用するために、江戸末期に導入された。戦時中は飼料、果糖原料として栽培が奨励されたため全国に広がったと、専門書にある。ところで、塊茎であるが「食用になるも味佳ならず」と牧野植物図鑑にある。味は個人差もあるが料理法によっても異なる。私自身何度か食べてみて、これを利用しない手はないと思ったくらいだ。ただ、根を掘りあげるので後がもたない。イヌキクイモは塊茎が太らないタイプ。花期 9~10月 生育地 原野 産地 各地散在、北米原産 類似種 キクイモ

オタカラコウ (キク科)



1989. 10. 23 蔵木町

花期 8~10月 生育地 山地 産地 各地散在

ネコノシタ (キク科)



1985. 9. 14 唐津市

花期 7~10月 生育地 海岸砂地 産地 玄海沿岸砂地



1989. 9. 10 小城町

ツクシアザミ (キク科)

山道を歩くと大抵その両側に豪壮な葉に鋭い刺<sup>とげ</sup>をもち、葉脈にそって白斑があるアザミを見かける。これが九州特産と云っていいツクシアザミ。本県のアザミもその例にもれない。アザミの仲間は、地方特産種が多いことで知られる。本県では春に咲くノアザミが類似種であるが、これは陽光地に多いのに対し、ツクシアザミはやや陰湿地に多い。湿地に見られるのはマアザミである。ヒメアザミはツクシアザミに似ているが、全体に細身、花も小さく個体数も少ない。花期 9～10月 生育地 山野 産地 各地の山野

ヒメアザミ (キク科)



1984・10・7 天山

花期 9～10月 生育地 山地 産地 各地散在

ヤナギアザミ (キク科)



1983・9 厳木町

花期 8～10月 生育地 山地の草原 産地 各地散在

カワラヨモギ (キク科)



1990, 10, 2 虹の松原

本県には、ヨモギの仲間が9種知られている。生育場所は、原野、山中、川原、海浜とさまざま。カワラヨモギは名前と異なり海浜に多い。新葉の出始めは、細裂した葉が綿毛をかぶって優しい感じがする。花をつける茎は直立して伸び綿毛はない。ヨモギの仲間は薬効が認められる種類が多く、カワラヨモギも古来有名な薬草である。黄だん、胆のう炎、急性肝炎等に効果があるという。根にハマウツボが寄生することがあり、私も虹の松原でこれを見た。花期 8～9月 生育地 海浜、砂地 産地 東松浦海浜

ヒメヨモギ (キク科)



1987・9・20 天山

花期 8～10月 生育地 山野 産地 各地散在

オトコヨモギ (キク科)



1984・10・7 天山

花期 9～10月 生育地 山野 産地 各地



ヒヨドリバナ (キク科)



1989. 9. 29 鎮西町

秋の七草として知られるフジバカマとよく間違われる。ヒヨドリバナは、山野至るところで見ることができるが、フジバカマの県内における分布は限られている。両者は葉における線点の有無、地下茎の長短等で区別される。また、フジバカマは半乾きの時、芳香を放つが、これによる区別は意外とむつかしい。中国ではこの芳香を賞でる風習があり、奈良時代に一連の中国文化とともに本種も日本にもたらされた。そのせいか、本県では唐津地方にのみ知られている。ヒヨドリバナは変化の多い植物である。花期 8～10月 生育地 山野 産地 各地

サワヒヨドリ (キク科)



1984・9・24 日の隈山

花期 8～10月 生育地 湿地 産地 各地散在

ツクシコウモリソウ (キク科)



1985. 8. 30 多良岳

花期 8～10月 生育地 山地 産地 多良岳、経ヶ岳



1989. 10. 1 伊万里市

ホウキギク (キク科)

川岸やや湿った原野に大群落をつくるわりには注目を浴びない。同じ北米原産のアメリカセンダングサも同じ条件のところに生え、果実が衣類にくっつくなどの特徴があるため、こちらの方へ関心がってしまうのか。密生していても、茎は上部でわずかに枝分かれするが、横には広がらず、葉も細いため気にならない。ほうきを立てた形に似ているということであろうが、ほうきに代用できるようなものではない。最近、葉が大きいヒロハホウキギクが目立ってきた。ホウキギクと混生しているので、主導権争いが当分続くだろう。花期 9月 生育地 川岸、原野 産地 各地、北米原産

アキノノゲシ (キク科)



1989. 9. 10 小城町

花期 8~10月 生育地 山野 産地 各地 方言 チッチグサ

タカサブロウ (キク科)



1989. 8. 12 鎮西町

花期 8~9月 生育地 水田、湿地 産地 各地 方言 ゴマノキ

ブタクサ (キク科)



1989. 10. 7 多久市

ブタクサとは、<sup>あいさよう</sup>愛嬌のあるとほけた名前であるが、今では悪名高い植物の一つになっている。スギと並んで花粉症の原因植物とされているからだ。しかし、本県ではブタクサの分布は極めて少なく、花粉症を引き起こすまでには至っていないようだ。むしろ、葉の切れ込みの少ないクワモドキ (オオブタクサ) が多いのでこれが問題だ。ブタクサが日本に入ったのは明治時代らしいが、本県には35年くらい前からである。しかし、定着することはなかったように思われる。それが最近目立つようになってきている。花期 9月 生育地 路傍、空き地 産地 各地稀産、北米原産

アキノキリンソウ (キク科)



1984. 10. 7 天山

セイタカアワダチソウの仲間だというと、ほとんどの人がびっくりする。アキノキリンソウの別名はアワダチソウ、セイタカアワダチソウの別名はセイタカアキノキリンソウといい、名前からも近い関係にあることがわかる。アキノキリンソウは、花卉が大きくて派手さはないが、落ち着いたみえる。秋の野の花の風格が備わっている。かつて、庭園にオオアワダチソウやカナダアキノキリンソウが植えられていたが、今ではほとんどみない。セイタカアワダチソウほどの、にぎにぎしさはないが、この悪印象にひきずられたせいだ。花期 10月 生育地 山野産地 各地

オオオナモミ (キク科)



1985. 9. 29 唐津市

オナモミ自身アジア大陸原産で、有史以前に渡来したものという。最近では北米原産のオオオナモミに圧倒され、ほとんど見かけなくなった。オオオナモミは、日本では大正時代に気付かれ、本県では30年くらい前に最初に知られた。オナモミに比べて果実の刺がはるかに豪壮である。刺の先端はかぎ型に曲がっており、これで衣類等にくっつく。これをヒントにしてマジックテープが発明されたという。立ち枯れていても果実だけはくっついている。執念というか、これが他を圧して分布を拡大するもとなのか。花期 9～10月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在

オナモミ (キク科)



1989. 9. 27 加部島

花期 8～10月 生育地 路傍 産地 各地散在

ツクシメナモミ (キク科)



1989. 9. 30 鎮西町

花期 8～10月 生育地 原野 産地 沿海地

## サワギキョウ

(キキョウ科)

昭和天皇の御著書「那須の植物」が発刊されたのは昭和37年であった。那須岳には何回か登ったし、当時地方植物誌に興味を持っていたが、何といっても、植物好きの天皇の御著書ということにひかれて買い求めた。序文に裕仁とあって天皇を感じた。本文には一般植物誌にはない花期や結実期が記されており興味深かった。しかし、何よりも印象深かったのは、巻頭にそえられていた皇后さま（現在の皇太后さま）がお描きになったサワギキョウの絵であった。それ以来、サワギキョウを見るとその絵を思い出す。花期 9月 生育地 湿地 産地 主として県東部、中部に散在



1985. 9. 7 飯木町

## マツムシソウ (マツムシソウ科)



1983. 9 天山

少し高い山に登ると、よく高山植物はないかと問われる。本県には厳密な意味での高山植物はない。しかし、マツムシソウは高山植物図鑑によく似た種類がのっているように、そういう雰囲気をもっている。九州では長崎、福岡両県にはなく、大分、熊本両県の高山地帯と本県に分布している。本県の場合、ごく狭い面積に限られている。このように変わった分布をする植物は、絶滅の危機にさらされやすい。本県のマツムシソウ自生地周辺は、植林が進んでいるので乾燥した草原を好むだけに今後が心配だ。花期 8～9月 生育地 草原 産地 天山山地に稀



1989. 10. 7 八幡岳

秋の野に咲く花を美しいものから順に数えて7種類のうち、オミナエシが入ったということは、万葉時代に限らず現代でも納得できる。人間の好き嫌いは人間の勝手であって、野生植物には関係ないことと言ってしまえばそれまでだが。トグシバとか、ススキ群落のなかにこの黄色の花を

オミナエシ(オミナエシ科)

見ると優美さだけでなく、心に染み入るものがあるように思う。古くは、オミナメシとよび、塩田町でもオンナメシと呼ばれているが、別名アワバナ、アワゴメバナとあるように小花がたくさんついているのを米に見立てたのであろう。花期 9月 生育地 山野 産地 各地散在



1986. 9. 6 八幡岳

オトコエシ (オミナエシ科)

オミナエシに対比する名前。花は似ているが白色。花色の違いだけでなく、オトコエシの根生葉は豪壮で毛がある。一般に白花が賞美られることが多いが、オトコエシの場合は黄花のオミナエシよりも、雅趣に欠けるようである。だからなのか、オミナエシを採っていく人はあっても、オトコエシを採る人はほとんどいない。時に両者の雑種で、花色が淡黄色のオトコオミナエシがある。切花を水にさしておくと醤油の腐ったにおいがする。中国で敗醬と呼ばれるゆえんで、これをうみ出し等に用いる。花期 9月 生育地 山野 産地 各地



1989. 10. 23 厳木町

<sup>あかね</sup>  
茜色とは、夕焼けの色であるが、もともとはアカネで染めた色のこと。染料にする根は黄赤色を呈している。これで、何度も何度も重ね染めして茜色にする。気が遠くなるような手仕事である。今の時代にはそぐわぬやり方である。「魏志倭人伝」にある、卑弥呼が魏王に贈ったという赤青

アカネ (アカネ科)

2色の絹のうち、赤色はアカネで染めたものと考えられている。アカネはあちこちの草叢に生えている。紫染料のムラサキのような運命をたどることはないだろう。ただ、地下部を掘り上げるなら、常に消滅の運命にさらされることは明らかだ。花期 9~10月 生育地 林縁 産地 各地散在

クルマバアカネ (アカネ科)



1985. 9. 29 唐津市

花期 8~10月 生育地 原野 産地 沿海地

キバナカワラマツバ (アカネ科)



1985・9・7 厳木町

花期 8~9月 生育地 草原 産地 厳木町稀

テリミノイヌホオズキ (ナス科)



1984. 10. 1 大和町

ナス科にはトマト、トウガラシ、ナス、ジャガイモ等有用植物も多いが、同時に有毒植物も多い。チョウセンアサガオ、ハシリドコロ等が著名であるが、本種も有毒。タバコはどちらに分類すべきか考えさせられる。有毒なものでも料理方法によって、重要な食糧となっていたり、薬用にされているのも多い。だから、有毒だからといって、無条件に拒絶反応を示さないことだ。イヌホオズキとの違いは、本種の果実の柄が同一個所から放射状に出ているのに対し、イヌホオズキは少し離れてついている点など。花期 9~10月 生育地 山野 産地 各地散在

ワルナスビ (ナス科)



1984. 9. 3 佐賀市

花期 8~10月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在、欧州原産

ハダカホオズキ (ナス科)



1988. 9. 16 伊万里市

花期 8~10月 生育地 山地 産地 各地散在





1984. 10. 23 小城町

キツネノマゴ (キツネノマゴ科)

学生時代に、キツネとあだ名をもつ先生がいた。<sup>きつね</sup>狐は時に守護神となり、信仰の対象にされるが、そんな意味でのあだ名だったようだ。ある時、キツネノマゴを見かけたので、先生の兄弟ですと言って差し出したら、しばし見入ってどこが似てるか兄弟<sup>あかし</sup>の証を示せと、逆襲されて往生したことがある。実は名前の由来を知らなかったからだが、今もってわからないでいる。畑にも生えるが、厄介な雑草というわけでもない。小さな花も一度に咲くわけではない。特徴を探そうにも普通の草だ。花期 8~10月 生育地 原野、路傍 産地 各地

ハグロソウ (キツネノマゴ科)



1985. 9. 3 鹿島市

花期 8~10月 生育地 山林内 産地 各地散在

スズムシバナ (キツネノマゴ科)



1988. 9. 16 伊万里市

花期 9月 生育地 山林 産地 各地散在



1989. 9. 30 鎮西町

ツシマママコナ (ゴマノハグサ科)

植物の生活様式にも様々なタイプがある。自活型が一般的であるが、全面的に他種に栄養を依存する寄生型、葉緑素を持ちつつ根はよそに寄生して栄養をもらう半寄生型がある。半寄生型は地上性と樹上性がある。ママコナの類は地上性の半寄生植物。どっちに転んでもよい、要領のよい型であるので一見強そうに思われるが、実際はその逆である。葉も大きくなく葉数も少ない。密生することもない。花だけは生きる権利を主張しているようだが、全体としては周囲に気兼ねしながら生活しているようにみえる。花期 9月 生育地 山野 産地 各地やや稀

ママコナ (ゴマノハグサ科)



1987. 11 浜玉町

花期 9~10月 生育地 山林 産地 各地

ミヤマママコナ (ゴマノハグサ科)



1985. 8. 23 巖木町

花期 8~9月 生育地 山林 産地 各地散在

**ヒキヨモギ**  
(ゴマノハグサ科)

初めて通る山道だった。山道とはいえ、快適なドライブウエーである。しばし車を止めて眼下の景色を眺め、周囲の植相に目を向けていると、見馴れぬ草がある。細裂した帯白色の葉は見たことがあるような気もあるし、初めてのようでもある。初見となると興奮するものだ。花が咲いていると思われる時期に再び遠出してみた。前と同じ場所で見したのは、ヒキヨモギであった。なあーんだという落胆と、例によって日ごろの観察力の不足を恥じた。もっとも、根生葉と成葉とでは形態の違いがあったのだが。半寄生植物。花期 8～9月 生育地 山野、草原 産地 各地稀産



1987. 9. 7 浜玉町

**ヒナノウスツボ**  
(ゴマノハグサ科)



1985・9・16 八幡岳

花期 8～9月 生育地 山地 産地 八幡岳、浮岳等に稀

**コシオガマ**  
(ゴマノハグサ科)



1989・10・3 七山村

花期 9～10月 生育地 山地林縁 産地 各地散在



1989. 10. 7 八幡岳

**アキチョウジ (シソ科)**

この花をみると、山歩きの疲れが何とはなしに和む気がする。こんな気持ちにさせるのは、植物の持ち味もあるが、この場合は生育環境がより大きく影響しているように思う。何しろ、アキチョウジが生えているところは、木洩れ日がわずかにそそぐ、湿度が高い、体にヒヤッとした感触を与えるところなのだから。アキチョウジは秋に丁字形の花を開く植物の意。花筒が長く、丁字に似ているからだ。香料や薬用にされる熱帯原産のチョウジも同様である。花が咲いた様は5月の鯉のほりを連想させる。花期 9月 生育地 山地 産地 各地散在

**キバナアキギリ (シソ科)**



1984・10・7 天山

花期 9～10月 生育地 山地 産地 各地散在

**キセワタ (シソ科)**



1986・9・6 八幡岳

散在 花期 8～10月 生育地 草原 産地 東松浦半島、他地区

ヤマハツカ (シソ科)



1984. 10. 1 大和町

こういうのが野の花の典型といったら、他の野の花に対して失礼になるだろうか。ハッカよりがっちりした葉と、素直に伸びた茎の先にしっかりした小花がつく。花の色で存在感をアピールしているようだ。山道でよく出会う。他の植物と混生することは少ないので目立つはずであるが、小さいので近寄らないとよくわからない。近寄ってみると、地味でもなく、派手でもなく、健康的な秋の野の花の感じがつまっている。一人よがりの感じかも知れないが、いくつかある類似種との区別はそんな感じに頼っている。花期 10月 生育地 山野 産地 各地 類似種 ヒキオコシ、ヒメジソ

ヒメジソ (シソ科)



1989・9・9 鎮西町

花期 9 ~ 10月 生育地 山野、路傍 産地 各地

アキノタムラソウ (シソ科)



1988・7・29 厳木町

花期 7 ~ 11月 生育地 山地、路傍 産地 各地



1989. 10. 23 神埼町

ノダケ (セリ科)

山道を歩いているとよく出会う。どうも道に沿って生えているようだ。大きな根生葉から直立する茎がでる。茎に着く葉は申し訳程度の大きさで、葉柄が鞘状になっている。ノダケの名の由来は知らないが、これが<sup>たりのこ</sup>筍の皮に似ていなくもない。また、周囲は背の低い植物ばかりで、高く(約1.5m)伸びた茎が竹に似ているようにも思う。これだけでも特徴がはっきりするが、さらに暗紫色の花が咲いておれば間違えようがない。春の伸びはじめの根生葉は食欲をそそるが、山菜にされているとは聞かない。花期 8~10月 生育地 山野 産地 各地散在

ハマゼリ (セリ科)



1989. 9. 27 加部島

花期 9~10月 生育地 海岸 産地 海岸

シラネセンキュウ (セリ科)



1988・10・16 富士町

花期 8~10月 生育地 山の谷間の湿地 産地 富士町、鹿島市平谷に稀

ナンバンギセル (ハマウツボ科)



1989. 9. 26 唐津市

野生植物、なかでも永年性植物の場合は、年によって花が多かったり少なかったりすることはよく知られているが、寄生植物にも年次変動があるとは知らなかった。ナンバンギセルは、ススキなどに寄生する1年生草本だが、平成元年は目立った。それは初めて見たとって持ち込んだ人が多かったことからわかる。ススキの大株のなかに好きこんで入り込む人はいないので、ふだんは気付かないのだが、外側まで咲きこぼれたのであろう。和名の南蛮煙管なんばんぎセルより、万葉時代のオモイグサ(思草)が情感があって良い。花期 9~10月 生育地 ススキ原 産地 各地散在

ギンリョウソウ (イチヤクソウ科)



1986. 9. 16 多良岳

ギンリョウソウの別名、ユレイバナ (幽霊花) にもうなずける。薄暗いやや湿った山中の細道に沿って生える。透明がかった白色の細長い胴体の先に大きな口を突き出している。恐る恐るのぞき見るといった感じだ。ギンリョウソウ (銀龍草) はそれを見る人の目の高さか。開花期はこの時期よりも5~6月が多い。葉緑素がないので寄生植物と思いがちだが、そうではなく菌根菌との共生関係にあるらしい。最近注目されている菌の1種だが、ラン科植物では珍しくない。花期 5~9月 生育地 山地 産地 各地の山地にやや稀産



1988. 9. 16 伊万里市

植物に関心を持っている人でも、意外とこの植物を見落としている場合が多い。分布が狭いわけではないので、花時を除いて特徴がないことによるのだろうか。しかし、分類学的には、シナノキ科はポダイジュなど樹木が多く、草本は珍しい科。名前の由来は、種子を鳥の食う胡麻に見たたものという。植物名には動

カラスノゴマ (シナノキ科)

物の名を借りたのが多いが、鳥では雀に次いで多いのが鳥のようである。どうしても身近な動物が対象になるからである。ゴマの名を付す植物も多いが、料理用として外来のゴマがすっかり定着していることを示している。花期 9～10月 生育地 山野 産地 各地散在



1983. 7 春振山

テリハアカシヨウマ (ユキノシタ科)

本種は多良岳が原産地。しかし分布は多良岳に限られるのではなく、県内の600m以上の高い山、九州の他県、対馬にも知られている。葉に光沢があるのが特徴。花は淡紅色から白色までである。天山山地には白色花が多いように思う。アカシヨウマのアカは赤で、茎が赤黄色を呈しているからであって、花色とは関係がない。シヨウマは「升麻」で薬用にされるサラシマシヨウマを指す。葉が似てはいるが、キンポウゲ科の植物である。花時になると目立つだけに類品が観賞用として栽培されている。花期 8～9月 生育地 山地 産地 各地散在





1989, 10, 4 鎮西町



1988, 10, 9 大和町

最近面白い話を聞いた。佐賀平野では、水田の区画整理が進んでいるが、それに伴いさらえ直した水路に、姿を消していたヒシが一齐に繁茂したというのだ。種子を蒔いたわけではないので、久しく水底に眠っていた種子が発芽したとしか考えられないという。水路をさらえることによって、

ヒシ (アカバナ科)

マコモやホテイアオイが取り除かれたが、それらが今までヒシの繁殖を抑えていたのだろうか。また、ヒシの側からみれば、繁殖を妨げられた障害物が取り除かれるまで辛抱強く待ったことになる。何だか自然が面白くなった。花期 7~8月 生育地 池沼 産地 各地散在

出島三学者の一人、シーボルトは江戸参府の途中、佐賀市内のクリークについて「イネの灌漑用<sup>かんがい</sup>に作った水路の中に私は二、三の興味深い植物を認めた。ヒツジグサ、ヒメビシ、オニバスなどである」(斉藤信訳)と記している。最近では濠の景観に邪魔になるとして取り除かれ、市内では

オニバス (スイレン科)

ほとんど見かけなくなった。葉の直径が2<sup>ふた</sup>に及ぶものがあり、表面はわにの皮のようだ。秋には葉が反り返り赤紫色の葉裏をみせる。種子(胚乳)を食べる。日本在来種であり、各地で天然記念物に指定されている。花期 8~9月 生育地 池沼 産地 佐賀市、大和町 方言 テンバス



1985. 9. 8 三日月町

メドハギ (マメ科)

メドハギは1年に1度だけ脚光を浴びる。浴びたと書くべきかも知れない。お盆の精霊さんの箸に使われるからだ。メドハギは原野や土手に普通にあるので、探し出すのは楽だが、なぜか今ではメドハギの箸を使うところはほとんどなくなってしまった。メドハギの名は筵のどろに由来するという。中国では占いをするのに今では竹(筵竹)を用いるが、古くはメドハギを用いたという。それがどのようにしてお盆の箸に用いられるようになったのか調べたいと思いつながら果たせないでいる。花期 9~10月 生育地 原野、土手 産地 各地 方言 メンズー

ヤハズソウ (マメ科)



1985. 9. 8 三日月町

花期 8~10月 生育地 原野、路傍 産地 各地

ネコハギ (マメ科)



1985. 9. 30 三日月町

花期 8~9月 生育地 草地、路傍 産地 各地

カワラケツメイ (マメ科)



1985. 9. 8 三日月町

和名は、河原に生える決明(薬草として栽培されるエビスグサのこと)の意であるが、むしろ原野の乾いたところに群生しているように思う。本種も薬草として知られており、利尿薬ないし腎臓病の薬とされている。方言でクサチャと呼ばれるように、お茶としての利用もされてきた。これは、古くからの全国的な利用法であるが、チャそのものも最初は単なる喫茶ではなく、民間薬として飲用されたものである。カワラケツメイの花は、マメ科独特の蝶形花からすれば、形態がややはずれ、5枚の花弁が放射状にのびている。花期 8~10月 生育地 河原、原野 産地 各地 方言 クサチャ

クサネム (マメ科)



1985・9・8 三日月町

花期 8~10月 生育地 湿地 産地 各地散在 方言 ネブイゲ

ヌスピトハギ (マメ科)



1984. 9. 20 伊万里市

花期 8~9月 生育地 林縁 産地 各地 方言 チンジブシ



1984. 9 小城町

クズ (マメ科)

道路の法面<sup>のりめん</sup>の補強にするために日本から導入されたクズが、アメリカで雑草化して困っているという。日本での強勢ぶりからして不思議ではない。クズの功罪を並べたてると、現在では罪のほうが大きいように思う。秋の七草の一つで、かつては、葉は牛馬の餌、<sup>つる</sup>蔓は結束材料、皮は布に織った。根からはくず粉をとる。山村では長大なクズ根掘りが冬期の副業であった。このように、クズのすべての部分が有効に利用されていたのだが、今では植林地で苗木の生育を邪魔する害草としてのウエートが大きいようだ。花期 9～10月 生育地 原野、林縁 産地 各地 方言 カンネカズラ

ヒメクズ (マメ科)



1989. 9. 9 鎮西町

花期 8～9月 生育地 原野 産地 各地 方言 ノマメ

タヌキマメ (マメ科)



1989. 9. 4 嬉野町

花期 8～9月 生育地 原野 産地 各地散在



1984. 10. 1 大和町

タンキリマメ (マメ科)

クズの葉を全体に小さくした感じ。しかし、莢が全く違う。よくメダケに巻きついているのをみかけるが、秋深く莢が熟すると赤く発色する。そして莢がはじけると、中から光沢ある黒色の種子が2個顔を出す。赤と黒の組み合わせが美しい。この種子(豆)が薬用になり、服すると痰が切れるというのでタンキリマメという。一般に美しいものといえば花となるが、本種の場合は莢の部分に観賞価値がある。色は異なるがノササゲも同じタイプのマメ科植物といえよう。花期 8月 生育地 山野 産地 各地散在

ノササゲ (マメ科)



1984. 10. 1 大和町

花期 9~10月 生育地 山地 産地 各地散在

ヤブマメ (マメ科)



1989. 10. 6 小城町

花期 9~10月 生育地 野原 産地 各地



1985. 9. 29 蔽木町

アカバナ (アカバナ科)

夏の後半になっても山歩きは暑い。午後ともなると、足が重く惰性で歩くようになる。谷川の瀬音がなつかしく感じられる。休みたいと思うところが、道の近くにあるのは、赤さびがにじんだ湿地である。とにもかくにも、そこに避難しよう。すると小さな赤い花が目に入る。アカバナはそんなにして気付くことが多い。何しろ花数が多いわけでもない。葉が少し赤味をさしていることもあるが、さしたる特徴もない。しかし、いつの間にかこんなにしてアカバナの生育する場所を覚えこんでしまっている。花期 9月 生育地 湿地 産地 やや高い所に散在

ミズタマソウ (アカバナ科)



1985・8・30 経ヶ岳

花期 8～9月 生育地 山地 産地 各地散在

チヨウジタデ (アカバナ科)



1988・10・2 多久市

花期 8～10月 生育地 水田、湿地 産地 各地



1987. 9. 20 天山

**アキカラマツ** (キンポウゲ科)

カラマツの名を冠した植物が本県にも数種類ある。いずれも類似種であるが、名前の由来は、マツ科の唐松からまつにちなむという。そうしてみると唐松の葉が短枝上に密生している様と、草本のカラマツ類の花の花弁がなく雄ずいおしずいが多数ついている様が似ている。アキカラマツは、カラマツの類中で最も背が高く、1.5mに及ぶものもある。しかも、自分より背が低い植物がある所に、ぬきんでて生えるので派手さはないが変わった葉と花の形が目立ちはする。小型の種類はかわいいので山草趣味の人には好まれる。花期 8～10月 生育地 林縁、路傍 産地 各地散在

**シギンカラマツ** (キンポウゲ科)



1983. 9 天山

花期 8～9月 生育地 山地 産地 天山、多良岳に稀

**サラシナシヨウマ** (キンポウゲ科)



1986・10・26 浮岳

花期 9～10月 生育地 山地 産地 各地散在

センニンソウ (キンポウゲ科)



1985. 9. 14 唐津市

クレマチスといえば、テッセンなどの園芸種の呼び名でもある。センニンソウはクレマチスの仲間。クレマチスを日本中に広めた育種家のところで、世界中から蒐めたというクレマチスの原種をみせてもらったことがある。大部分のクレマチスは、センニンソウの花形をしていて、花弁が大きいのは少なかった。しかし、冬に咲くものや常緑性のものであり、花形だけで観賞価値が決まるものではないということだった。とはいえ、センニンソウが庭に持ち込まれることはないだろう。花期 8~9月 生育地 山野 産地 各地

ボタンツル (キンポウゲ科)



1986. 9. 10 小城町

花期 8~9月 生育地 山地、原野 産地 各地

コバノボタンツル (キンポウゲ科)



1980. 9. 15 小城町

花期 8~10月 生育地 山地 産地 各地





1989. 9. 27 加部島

### ザクロソウ (ザクロソウ科)

背が低く、小さな花(果実)がたくさんついている。この地面にはいつくばっている、小さな植物のどこに、ザクロを連想させるものがあるのだろうか。ザクロといえば、だれでも果実が裂けて、淡紅色の種子が露出しているのを思い浮かべるはずだ。ザクロソウの小さな果実が、はじけたところをルーペでみると、ザクロの果実に似ていないでもない。すばらしい観察眼だと感心しつつ、専門書を見ると葉の形状がザクロの葉に似ているからとある。さして特徴的でもない葉によるのが事実なら名付け親は一般大衆ではなく植物の専門家であるに違いない。花期 8~10月 生育地 路傍、畑 産地 各地



1984. 10. 1 大和町

### ヒナタイノコズチ (ヒユ科)

イノコズチは、茎の節がふくれているのを猪の膝に見立てた名前という。猪の膝を連想させたのは他にもあるように思う。猪のぬた場は、大概明るい林床にあり、そこには、イノコズチが生えている場合が多い。猪との結びつきが、まず生態的特徴にあったのではないかと。果実は衣服にくっつく。山歩きをした人なら必ず経験があるはずだ。一つずつ取りはずしたいまいましさを。植物にとっては、自分の分布範囲を広げるための有効手段というわけだ。猪もその分布を広げるのに役立ったであろう。花期 8~9月 生育地 山野、荒地 産地 各地 方言 ゼンモン 類似種 イノコズチ、ヤナギイノコズチ

ノゲイトウ  
(ヒユ科)

どこにでもあつたようで、記憶をたどってみるとそんなに見えていないというのがある。ノゲイトウもその一つ。私の故郷の畑にたまたま生えていて、子供なりに気付いていたが、その後他の地区ではあまり見えていない。もともと熱帯地方原産で、古い時代に日本に入ったという。観賞用として入れたのだろうが、今では庭に栽植されている様子はない。そんな来歴のためか、畑の隅などで見ることが多い。庭植えされている鶏冠状のケイトウはよく似ているが、ノゲイトウから分化したものではないことは形態的特徴からわかる。花期 9月 生育地 畑周辺 産地 各地散在



1989. 9. 10 三日月町



1985. 7. 4 有田町

ママコノシリヌグイ (タデ科)

茎に鋭い逆刺がある。素手でつかむには勇気がいる。<sup>ママコ</sup> 継子はいじめの対象になる。刺のある植物をあてがわれれば痛いに決まっている。刺のある植物はたくさんあるのになぜこの植物が継子の尻拭い<sup>しりふき</sup>でなければならなかったのだろう。畑の縁によく見かける。独特の葉形と葉色は目をひくし、花もそれなりに美しい。刺にしてもバラやタラノキに比べればはるかに控えめである。実際にいじめに使われたというより、ブラックユーモアと思われるが、それなりに考えられた名前ではある。佐賀の方言ではヨメノシリヌグイとなる。花期 9月 生育地 原野、路傍 産地 各地

オオケタデ (タデ科)



1989. 8. 24 北波多村

花期 8～9月 生育地 原野 産地 家周辺、各地散在、アジア原産

イシミカワ (タデ科)



1989. 9. 30 鎮西町

キ 花期 9～10月 生育地 原野 産地 各地 方言 ビキノツラカ

ポントクタデ (タデ科)



1989. 9. 10 大和町

花期 9～10月 生育地 水辺 産地 各地散在

ホソバノウナギツカミ (タデ科)



1989. 10 肥前町

花期 8～10月 生育地 水辺 産地 各地散在



1988. 9. 16 伊万里市

イラクサ科のなかには、山菜として賞味されるものが多い。ウババミソウはその代表であろう。アオミズもまた珍重されるらしい。本県には、これらを食する習慣はないので、私なりに試食してみた。アオミズは群生するので材料はいくらでも手に入る。名前のとおり、青々とした葉とみ

アオミズ  
(イラクサ科)

ずみずしい茎からなっている。特別感心する味ではなかったが、夏に試食したせいとも思えた。ところが、ものの本には葉をはずし茎の皮をむいてゆでるとある。手をかけた料理はおいしさ。再度試食する機会をねらっている。花期 8~9月 生育地 陰湿地 産地 各地散在

オニヤブマオ  
(イラクサ科)



1988. 10. 7 唐津市

花期 8~10月 生育地 沿海地 産地 沿海地

ヤブマオ  
(イラクサ科)



1989. 9. 9 鎮西町

花期 8~9月 生育地 山野 産地 各地

カナムグラ (クワ科)



1989. 9. 10 小城町

原野や路傍、庭などを覆い尽くす鉄のように強い草の意。それほど強じんとも思えぬが、ひとところより勢力範囲が拡大しているようにみえる。万葉集に詠まれたヤエムグラは本種とする説がある。それはヤエムグラを秋草として詠んでいるからで、カナムグラはまさしく秋草であり、現在のヤエムグラは春草である。カナムグラは畑には侵入しないためか、害草としての認識はさほどない。雌雄異株で、突き出た雄花穂の下の葉が花粉で黄色く染まっていることがある。すごい花粉の量に花粉症経験者は鼻がむずがゆくなる。花期 9月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在

ヒガンバナ (ヒガンバナ科)



1989. 10. 6 小城町

ちょうど、秋の彼岸のころに密生して花を開く。子供のころ、この植物に対する印象は良いものではなかった。毒花であり、茎を折って汁がつくとかきができる。それでも恐る恐る、茎を2~3本の長さに皮をつけて両側に折り、提灯<sup>ちようちん</sup>といって遊んだものだ。ヒガンバナの分布地は、人里から離れたところにはない。人が分布の拡大を手伝ったのであろう。かつて、ききんの年にこの鱗茎<sup>りんけい</sup>を晒して食用にして命拾いしたという記録がある。葉と花が別々の時期に出るのも面白い。花期 9月 生育地 路傍、畦 産地 各地 方言 ヒガンバナ

メヒシバ (イネ科)



1986. 8. 30 小城町

少しでも土が肥えていると至るところに生える。畑には大威張りで生える。一斉に発芽して葉が1、2枚のころならよいのだが、油断すると茎は横にはい、各節から根がのび出し、しっかりと大地に固定する。こうなるともういけない。引き抜こうとしても節からぶつぶつ切れ手間がかかることおびただしい。全世界に分布する国際派。なるほどと思う。日本へは古い時代に畑作物と一緒に渡来したと考えられている。名前は雌日芝の意。雄日芝に対比する。オヒシバはより固い地面に生える。花期 8月 生育地 畑、空き地 産地 各地 方言 オコトシ、シラクサ

コメヒシバ (イネ科)



1989・10 小城町

花期 8～10月 生育地 畑、路傍 産地 各地

オヒシバ (イネ科)



1984. 10. 23 小城町

花期 8～10月 生育地 路傍、原野 産地 各地 方言 スモトイグサ



1989. 10. 1 伊万里市

トダシバは埼玉県戸田地方に多かったことから名付けられたという。しかし、これほど日本全国津々浦々に自生がみられるものはないといって過言ではない。イネ科植物の特徴として、目立たない、種の判別がむづかしいことがこのような結果になったのであろう。どんなところでも生育するだけに、変化が多く同定に苦しむことがある。かつては、道路造成に伴い土端の土止めにこの植物が使われた。高山の草原から切り出されるらしく、高山にしか生育しない植物が顔を出すことがあった。花期 8~10月 生育地 山野 産地 各地

池沼に生えるので、水に濡れないでこれを採ろうとするのは無理だ。子供のころ、お盆の前になると、これを採るために水につかった。これを干してむしろに編み、精霊さんの棚の下敷にするためだ。水が胸あたりまでくる深さだった。マコモが生育する水深は決まっているとみえ、岸に沿ってある幅をなしている。もっとも、池沼の水深は稲作との関係で変動する。川干しでもあれば、マコモが子供の遊びの道具となる。ちゃんばらごっこ、ちゃんかけ、ちゅうこうはんこう等々。マコモは古くは、こも即ちむしろにされた。花期 8~9月 生育地 池沼 産地 各地 方言 コモ



1985. 9. 8 三日月町

トキワススキ (イネ科)



1987. 7. 10 太良町

海岸地帯だから、特別にススキが大きくなったのかと思えるくらいよく似ている。しかし、開花期が早く、ススキ原をなすこともほとんどない。子細にみると、穂のなかの花数はススキより多いが、一つの花の大きさはススキよりも小さい。名前の通り常緑である点でも異なる。強風のうなる海岸地帯では、荒波にふさわしい景観と思うのは私だけの偏見であろうか。1種ハチジョウススキがある。よりススキに近い。トキワススキが玄海側と有明海側ともに分布するのに対し、玄海側にしか分布しない。花期 8～9月 生育地 原野 産地 海岸

アブラススキ (イネ科)



1989・9・6 小城町

花期 9～10月 生育地 山野 産地 各地

モロコシガヤ (イネ科)



1989・9・4 嬉野町

花期 8～10月 生育地 草原 産地 各地散在





1986. 9. 25 多久市

コナギ (ミズアオイ科)

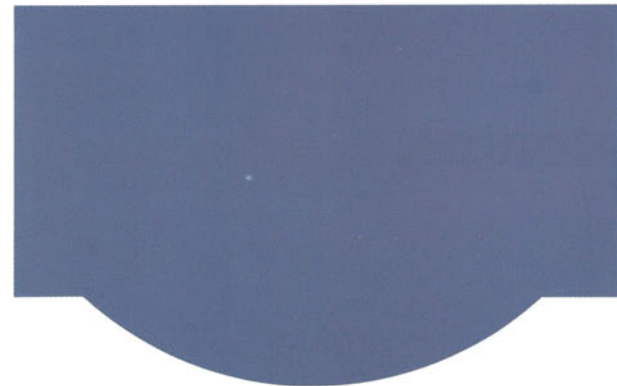
除草剤が使われるようになったせいかな、水田のコナギはほとんど見かけなくなった。ところが休耕田をのぞくと、前からいたような、当たり前で生えている。水田の時は生えても気付かなかったのか、捲土重来を期して種子のまま長年耐えていたのか。数は多いが小さな種子である。ともかくも、人の目に触れないようなところで命脈を保ってきたことになる。それが生物の本能的なものとはいえ、同類のホテイアオイを重ねても、何か特別、性の強さを感じさせられる。変化に富んだ葉形をもっている。花期 9月 生育地 水田 産地 各地散在 方言 ナギ

Handwriting practice area consisting of 20 horizontal dashed lines.



10・11月の

野草



ヤクシソウ  
(キク科)



1989. 10 小城町

ヤクシソウは、切りたつた崖<sup>がけ</sup>の風化した土が堆積<sup>たいせき</sup>しているようなところに好んで生えている。黄色い花で一見目をひくのだが、だらしなくみえてインパクトに欠けるうらみがある。薬師草の意と思われたので薬草の本をみたが、見当たらない。いくつか見てようやく探しあてたのには、胸やけ、食べ過ぎ、胃のもたれによいとあった。生葉をかんで汁を飲み下すとある。生葉を切ると乳液<sup>乳液</sup>がでる。なめると苦い。そういえば、かつて家の近くの畑に作って毎日葉をかいで食べたチシャがこれに近い種類であることを思い出した。花期 9～10月 生育地 山野 産地 各地

ホソバワダン  
(キク科)



1985. 11. 17 唐津市

花期 10～12月 生育地 海岸 産地 玄海沿岸

キッコウハグマ  
(キク科)



花期 9～10月  
産地 各地  
生育地 山地

1988・10・15 巖木町



1989. 9. 27 唐津市

センダングサ (キク科)

瘦果<sup>せうか</sup>が熟して黒色になると、そこを通り抜けるのがちゅうちょされる。どうしてわざわざそんなところを通り抜けるかという、子供の遊び場である原野に生えているからである。覚悟を決めて突っ走ると、やっぱり衣服に果実がくっついている。一つ一つ取りはずすのが面倒だし、毛製だとそれまで持っていかれ、いやな気分になる。センダングサも渡来植物というが、最近もずっとこの仲間が渡来し、これらに押されたのか、センダングサはあまり見かけなくなった。どちらにしても、被害を受けるほうは同じだ。花期 9月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在 方言 キチギャー



シロノセンダングサ (キク科)

花期 10月 生育地 原野、路傍  
産地 各地散在、熱帯原産

1989. 10 鹿島市

アメリカセンダングサ (キク科)



1984・9 伊万里市

花期 9、10月 生育地 原野、河原 産地 各地  
北米原産



1989. 10 鹿島市

河川堤防、最近では高速道路沿いが黄色の花でうずまる。美しいなと思って眺めるのだが、世間のみる目は冷たい。花粉症をひきおこす、他の植物を押しつけて自分の勢力を拡大するなどが、印象を悪くしているのだが、花粉症とは無関係という説もある。本種が日本に入ったのは戦後のことで、最初に福岡県でみつがっている。本県では、昭和40年代の初めごろに気付かれた。大群落をつくっていたのが、何もしたわけではないのに、いつの間にか目立たなくなっている。おごれる者久しからずの植物版か。花期 10~11月 生育地 荒地、堤防 産地 各地、北米原産



トキンソウ (キク科)

花期 8~10月 生育地  
庭、畑 産地 各地

1988・10・2 多久市



シュウブンソウ (キク科)

花期 8~10月 生育地  
山地 産地 各地

1989・10・1 黒髪山



1989. 10. 1 多久市

ヨメナ (キク科)

花をノギクと呼ぶところが多い。菊の花に似ているからだが、植物学的には同属ではない。春の新芽はハギナと呼ぶ。新芽を摘んで塩ゆでにし、細かく刻んで炊きあがったご飯に混ぜる。ハギナ飯である。これが畑に入ると大変。白い地下茎を伸ばしてあちこちに広がる。地下茎が深いだけに除草が大変なのである。この類には似た植物が多く、外観だけではわからない場合がある。こういう時は、ルーペで花をむしって精査しなければならない。気の毒だがやむをえない。花期 9～10月 生育地 原野、路傍 産地 各地 類似種 オオユウガギク、ノコンギク

オオバヨメナ (キク科)



1986・9・3 多良岳

花期 8～10月 生育地 山地 産地 経ヶ岳、多良岳に稀産

ヤマシロギク (キク科)



1989・10・23 天山

花期 9～11月 生育地 山地 産地 各地



1985. 11. 3 多久市

ヤマジノギク (キク科)

本県でノギクと呼ぶのは、ヨメナのことが多い。ヤマジノギクの花はヨメナに似たところがある。しかし、生態型はかなり異なる。ヨメナが地下茎をひいて密生するのに対し、ヤマジノギクは単生し頭でっかちに花をつけ、不安定に風にゆれている。どういうわけか、風の当たる草原で一頭地を抜いて生えるので目立ちもするが、不安定さも増す。山地野菊に対し、ハマベノギク(浜辺野菊)は、これはさすがに潮風に適応して背が低く、地面をはうようにして花をたくさんつける。花期 10月 生育地 山地 産地 草原



ブゼンノギク  
(キク科)

花期 10~11月 生育地 岩上 産地 黒髪山、嬉野町、鹿島市に稀産

1986・11・2 黒髪山

ハマベノギク (キク科)



1985. 11. 17 唐津市

花期 8~11月 生育地 海浜 産地 玄海沿岸に散在

シラヤマギク (キク科)



1988. 10. 15 巖木町

花期 8~11月 生育地 山地 産地 各地

ホソバオグルマ (キク科)



花期 9~10月 生育地 草原  
産地 神埼町、巖木町、呼子町に稀

1989. 10. 27 巖木町

ホソバコンギク (キク科)



1984・11・26 多久市

花期 9~10月 生育地 川岸 産地 各地散在 類似種 タニガワコンギク

ノコンギク (キク科)



1986. 11. 2 山内町

花期 9~11月 生育地 山野 産地 各地散在





1985. 11. 17 唐津市

### ダルマガイク (キク科)

潮風が強くと当たり、土の少ない岩の割れ目、くずれやすい断崖などに生育している。こんな条件を好むのか、あるいはやむをえず生育しているのか考えてしまう。背丈はあまり伸びず、下部は木質化している。葉は多肉気味で、表面は毛でおおわれていて白く見える。これらは環境適応型である。矮性で丸く、石の上にあるのが達磨を連想させたのか。花が咲くとまた一段とさえる。おもねるでもなく、高ぶるでもなく、卑屈でもなく己のために咲いているのだが、孤高の美を漂わせているようだ。花期 11月 生育地 海辺 産地 玄海側散在 方言 イワギク

### ウラギク (キク科)



1984・11・4 川副町

花期 9～11月 生育地 海岸潟地 産地 海岸

### フクド (キク科)



1984・11・4 川副町

在 花期 9～11月 生育地 海岸潟地 産地 有明海側に散



1984. 11. 23 七山村

### シマカンギク (キク科)

キクを、栽培される狭義のキク属に限定すると、本県には本種とキクタニギクが分布するだけである。キクタニギクは玄海側に分布が限られている。栽培されている大輪の菊は、原生種があるわけではない。シマカンギクとチョウセンノギクの交雑種から分化発展したとする説が一般的である。だから、菊苴童の話や唐詩に詠まれたころのキクは、中国の野生種ハイシマカンギクであったはずである。私もこれ入手し植えていたところ、一時増殖したがいつのまにか消滅してしまい、キク自身の寿命は長くなかった。花期 11月 生育地 林縁 産地 各地散在 方言 ヤマギク



1985. 11. 17 玄海町

シマカンギクに比べれば花がにぎにぎしい。別名アワコガネギク(泡黄金菊)。葉先はとがり気味であるが、ちょっとみたところでは区別がむづかしい。野生菊であるが栽培もされている。むしろ栽培菊が野生化したような感すらある。本種の分布は局在化しており、本県では玄海の離島と

### キクタニギク (キク科)

東松浦半島付近に限られる。世界的にみると、中国北部、旧満州、朝鮮から対馬、壱岐、唐津、沖ノ島を経て四国、本州へ至っている。これはかつて、東方から文化を受け入れていた頃のルートと偶然にも一致している。花期 10~11月 生育地 山野 産地 東松浦半島付近に散在

ツワブキ (キク科)



1989. 12 鎮西町

春、新芽が伸びだして葉が開く前の、全体が灰褐色の毛でおおわれている時期の葉柄を、毛だけをこすりとり皮を剥がずに料理する。山菜の本場、東北地方や北海道にはツワブキがないので、これにふれていない専門書もあるくらいだが、私はこの独特の風味が好きだ。秋の花は、花卉の着き方もぶつき

らぼうで、整っていないようにみえるが、それがまた日本人好みである。つややかな濃い緑の葉との対照も妙である。庭に植えたのは食用目的ではない。もちろんその姿を楽しむためだ。花期 10月 生育地 林縁、樹下 産地 各地 方言 インツワ、ツバ、ツワ

サイヨウシャジン (キキョウ科)



1987. 11. 9 多久市

細葉沙参、別名ナガサキシャジン。ツリガネニンジンの仲間は、花が釣鐘形で下を向いて咲く。下向きの花は全開しないものが多い。サイヨウシャジンの花は花卉の先端も下を向いたままであり、北九州はすべてこの型である。山でうまいのは、オケラにトトキとうた

われるが、トトキはツリガネニンジン=シャジンのこと。たしかにあっさりしてくせはないが、どうしても食べてみたいというものでもないようだ。根は肥厚、チョウセンニンジンに似ているが薬効は低いという。花期 9月 生育地 山地、原野 産地 各地散在

ツルニンジン (キキョウ科)



1985. 10. 10 富士町

キキョウ科の花は、鐘状になるのが多い。ツルニンジンツルニンジンの花は豊富な鐘である。ところで、どういつうわけか、この花を見る機会が少ない。3ないし4出葉の特徴ある葉をつけた、長い蔓を見ることは多いのにである。多分に栄養状態が関係しているのだろうか、勝手に想像している。こうして、花を見る楽しみは倍加するのである。蔓の巻き方は一般に決まっている場合が多いが、ツルニンジンツルニンジンは右に巻いたり左に巻いたりで節操がない。ニンジンニンジンの名の由来は、塊根の形状がチョウセンニンジンチョウセンニンジンに似ているからという。花期 8~9月 生育地 山野 産地 各地散在

ヒヨドリジョウゴ (ナス科)



1986. 12. 7 東脊振村

日当たりの良いところでは、小木をおおいき尽くして茂っている。しかし、日当たりが良くと、数本のつるを上方へ伸ばしているだけである。冬にすっかり枯れ落ちたかと思いきや、翌春枯れつるから新つるが吹き出している。細いつるながら、死んだふりをしていたわけだ。この植物の白い花など気付く人は少ないが、明るく紅熟した果実に目を見張らない人はいない。とくに逆光下では、透明感が冴えていて良い。有毒植物であるが、名前の通りヒヨドリが好んで食べるという。毒に当たらないのかしらん。花期 9~10月 生育地 山野 産地 各地



1985. 10. 20 小城町

### ノブドウ (ブドウ科)

ブドウに似た葉をもち、蔓<sup>つる</sup>状に伸びる。ブドウの仲間であるが、果実は食べない。方言ではイヌガネブとかウマノガネビ（ガネブまたはガネビは同科で果実を食するエビズルのこと）という。その果実は色が白、紫、赤、青などに変化して面白い。なかに特別大きい果実があるが、これは虫えい（昆虫が卵を生みつけたもの）である。子供のころに、茎を短く切って一方を口にあて強く吹くと汁がでるので、これを集めて点眼すると、突き目がよくなると聞いたことがある。ためしたことはないが、全国的な伝承のようである。花期 8月 生育地 山野 産地 各地



1983. 10. 26 江北町

### アマチャヅル (ウリ科)

この植物が太平の夢を破られてまだ10年にならない。民間では、甘茶の代用にすると言った本もあるが、牧野植物図鑑には、葉には甘味あれどもあえて利用することなし、とある。それが、薬効成分の含有が確認されたことから一躍脚光をあびた。ブームというのはすごいものだ。スギ林の下や山川べりに目立たなく生えていた草が、またたくまに消えていったのだから。必要とあらば、まぎらわしいヤブガラシとの区別点などへっちゃらだ。民間薬ブームの先べんをつけた草であるが今ではもう落ち着いたようである。花期 9月 生育地 山林樹下 産地 各地散在

## ヒシモドキ (ゴマ科)



1988. 11. 7 小城町

名前のとおりヒシに似たところがある。しかし、ヒシよりも葉は丸みをおび、水面全体を葉でおおうということはない。万事ひかえ目で、おとなしい感じ。ゴマの仲間とは珍しく、ゴマの花に似た淡紅色の花を水上に開くが、花を開かないまま実をつける（閉鎖花）場合が多い。果実もヒシに似てい

るといえないこともないが、私には水生の昆虫にみえる。現実の昆虫とはかなり異なるが、今では少なくなった「たいこうち」を思い出す。これはたぶん、擬態で万事ひかえ目なこの植物が、鳥に伝播を頼もうとするのではあるまいか。**花期 8月 生育地 池沼 産地 佐賀市、小城町**

## ヒキオコシ (シソ科)

芽立ちころは、ごつい感じであるが、群生して高さが1分くらいになるとふんわり、やんわりした感じになる。花は小さくて淡く、まばらにつくので一見頼りなく見える。しかし、これが種の特徴となる。それでも判別しづらい場合は、葉を噛んでみる。苦味が強ければ本種。ヒキオコシは引き起こしで、腹痛の時、これを服すれば起死回生の効があるためといい、別名延命草ともいう。茎葉を陰干しして小さく刻み、煎服するというのが一般的な使用方法である。古くから知られた民間薬の一つ。**花期 9～10月 生育地 山野 産地 各地散在**



1988. 10. 25 巖木町

スズメノトウガラシ (ゴマノハグサ科)



1988. 10. 2 多久市

よく植物の名前を覚えていますねと言われ、冷や汗が出るのだが、この場合識別力と記憶力が問われているように思う。先生や参考書を通して名前を知り、これを記憶していなければならない。中には似たような花と名前の植物が、似たような環境に生えているところからがらってしまうことがある。た

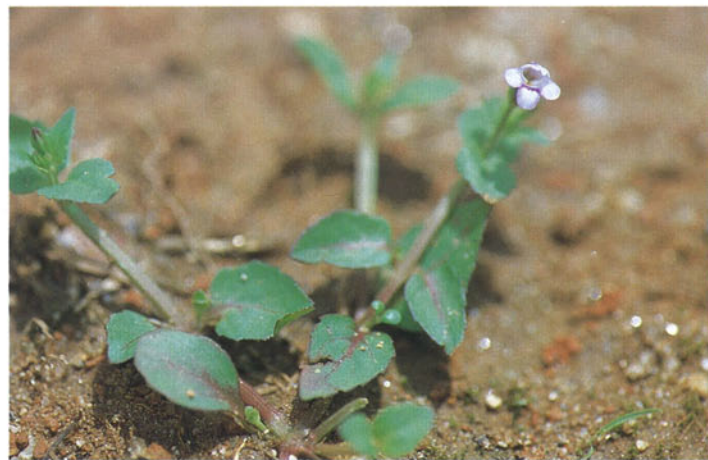
とえば、水田の畦畔雑草であるスズメノトウガラシ、アゼトウガラシ、サワトウガラシはいずれもゴマノハグサ科であり、形態もよく似ている。もっと若い時にしっかりと覚えておけば混乱することがなかったのにと逃げているのだが。  
花期 9月 生育地 畦畔湿地 産地 各地散在

アゼトウガラシ (ゴマノハグサ科)



花期 9月～10月 生育地 水田、湿地 産地 各地散在  
1988・10・2 多久市

ウリクサ (ゴマノハグサ科)



花期 8月～10月 生育地 畑、原野 産地 各地  
類似種 シソバウリクサ  
1990・7・14 小城町



1989. 10 小城町

茎が太くて直立し、各節にたくさんの花をつけるものから、細くて草の中に埋もれるようになびいて、花を1個しかつけていないものなど個体差が大きい。花が大きくて目立つために、このような観察ができる。秋の草花が目立つのは草原であるが、こういう場所は公園化されている。T市では、そういう草原にありきたりの樹木を植え、山道の両側の美しい草花が咲く草原を刈り払ってしまった。一方、O町ではリンドウ、オミナエシ、ハギなどを注意深く残して公園化していた。O町のファンになったのはいうまでもない。花期 10月 生育地 草原 産地 各地散在



1985. 8. 30 経ヶ岳

リンドウと違って蔓<sup>つる</sup>を伸ばす。また、生育場所も日が当たるところよりも、陰湿な樹下を好むようだ。スギ林のように、暗くて落葉だけが目につくようなところにも深緑の葉が横たわっている。一方、日が当たるところでは、長い蔓を伸ばし、小木やメダケ等に巻きついている場合が多い。花は時々、時節はずれの真冬にもみることがある。紅紫色の球形の果実は、冬でももちろん、つやつやしていて寒さを感じさせない。寒さ馴れしているようにみえるのは、樺太、南千島まで分布していることから当たり前のことかもしれない。花期 9~10月 生育地 山地 産地 各地散在



## センブリ (リンドウ科)

千回煎<sup>せん</sup>じ出してもなお苦味が残るという意。苦味がある植物は大抵胃の薬にされるが、センブリはその代表だ。秋になると、センブリを採っているおばあちゃんによく出会う。生育場所を知っているからと思われるが、この小さな植物をある程度の量をあつめるのは、かなり根気のいる仕事だ。素人は数本は採れるが、それ以上は無理なので捨ててしまう。センブリは2年かかって一人前になる。だから捨てるくらいなら最初から採らないほうがよい。もったいない話だ。栽培してもなかなかうまく育ってくれないという。花期 9~10月 生育地 草原 産地 県内山地に散在 方言 センブイ 類似種 イヌセンブリ



1989. 10. 5 厳木町



## ムラサキセンブリ (リンドウ科)

花期 9~11月 生育地 草原  
産地 各地散在

1988. 10. 15 厳木町

## アケボノソウ (リンドウ科)



1989. 10. 23 七山村

花期 9~11月 生育地 湿地 産地 各地散在

ヒメミソハギ (ミソハギ科)



1988. 10. 2 多久市

水田雑草を調べようと思えば、休耕田を探せばよい。湛水状態でなくてよいが、乾いていないこと、耕起されていないことが必要。こういうところを数箇所まわれば、水田雑草のほぼ全容を知ったことになる。水田という単純な生態系なればこそである。イネとほぼ同じ高さに伸びるもの、地面に低くはうもの、中間くらいに伸びるものなど。ヒメミソハギは光を好むので、光がとどく高さに伸びる。それでもイネが密生しだすと生育不良になる。稲刈り後は、全体が紅紫色に染まり美しい。花期 9月 生育地 水田、湿地 産地 各地散在

キカシグサ (ミソハギ科)



1989. 9. 10 小城町

花期 9~10月 生育地 湿地、水田 産地 各地

ミズマツバ (ミソハギ科)



1990. 9. 27 大和町

花期 8~10月 生育地 湿地 産地 各地



1984. 10. 23 小城市

ツツラフジのフジは蔓を意味する。ツツラは、もともとツツラフジの蔓を編んで作った衣服などを入れるふた付きのかごを意味する(大辞林)。本県では、今も土瓶の柄をつくるのに使われている。ところで、アオツツラフジは蔓に弾力性がなく、この用途には不向き。私の家の庭にも入り込んでいて、他の庭木に巻きついている。取り除こうかとも考えたがそれほど邪魔になるとも思えない。実が黒熟するまで待ってみることにしたが、それは白粉を帯びて光沢がなく、すぐにしなびて頼りなげだった。花期 8月 生育地 山野 産地 各地 方言 イトカズラ



1983. 11. 13 厳木町

## ツリフネソウ (ツリフネソウ科)

谷川の水しぶきがかかる場所で、青黒いほどの葉色で茎も膨れ、いかにも水をたっぷり吸い込んだ生きのよさを感じる。しかし、ツリフネソウは花の形に特徴がある。名前の様に舟を吊るした形をしている。舟のなかでもゴンドラに似ている。だが、本県人にはゴンドラよりも、<sup>かよと</sup>兜に似ているとみた。花を指先にくっつけて兜に見立てて遊ぶ。兜をつけた指人形というわけだ。同じ仲間のハウセンカもかつては、植物遊びによく利用されたものだ。紅い花を摘んで爪先を染めて遊ぶ。もちろん女子の遊びである。花期 9月 生育地 湿地 産地 県東部散在 方言 インビチョイ



1989, 10, 24 佐賀市

ワレモコウは、語感がよいのか名前にひかれるものがあり、自分なりのイメージをふくらませながら実物を見たいと願っていた。ところが、後になって知ったのだが、本県での分布地は限られていて、容易に見る機会がなかった。それが、高度成長時代に、道路があちこちに作られるようになると、土端の土止めの芝の中から点々と顔を出した。どこか他県の山の芝草であることがうかがえた。花は私がイメージしたものよりもずっと素朴であった。今では、かつて見た土端からはほとんど消滅してしまっているようである。花期 9～10月 生育地 原野 産地 神埼町、佐賀市等散在



1989, 10, 24 佐賀市

花期 9～10月 生育地 湿地 産地 三田川町、神埼町、佐賀市等に散在



1989・10・24 佐賀市

花期 9～10月 生育地 湿地 産地 鳥栖市、東脊振村、神埼町、佐賀市に散在



1989. 12 伊万里市

この類はユキノシタを除いて、薄暗くて湿ったところに生える。そんなところでは丸い厚ぼったい葉が気味悪く感じられることすらある。花が咲くと白い特異な花弁を持つ花が全体にばらばらとちらばり、やさしくてかわいい雰囲気をかもし出す。花は完全に左右相称でもない。大という字に似ているから大文字草。類品のジンジソウは人の字に似るからというが、人の形にも似ている。ジンジソウの分布が広い。ジンジソウによく似ているが、ダイヤモンドソウは葉の切れ込みが小さい。花期 10月 生育地 山地、湿った岩上 産地 黒髪山、多良岳



1989. 10. 5 敵木町

本県には高原をドライブできるようなところはないけれど、よそでドライブ中、白い花がパッと目に入り、後ずさりして見直したという人が結構いるのに驚いた。それがウメバチソウだったというのだが、小さな花だから車中から細部がわかるはずはない。瞬間の視覚が人の心に訴えるものを持って

いたのだろう。ウメは外来種とされるが、古来日本人に愛好され梅鉢の紋所にも使われるようになった。試みに梅の紋を調べたら50種以上の変化がみられた。しかし、ウメバチソウによると思われる紋は探すことができなかった。花期 9月 生育地 草原 産地 高原を中心に各地散在

タンナトリカブト (キンポウゲ科)



1984. 10. 7 天山

世に有毒植物とよばれるものが多数あるが、人命にかかわるような強い毒性をもつ植物は限られる。トリカブトはその数少ない植物の一つである。かつて、獣を射殺す毒矢に用いられたことはよく知られている。この毒も少量だと薬になり、漢方では神経痛などに用いられる。塊根を烏頭、付子という。国語の教科書に狂言があり、そのなかに「ぶし」とあったのを思い出す人もいるだろう。トリカブトは花の形が舞楽で伶人がかぶる帽子に似ているため。トリカブトの種類は多く、地方によってかなり異なる。花期 10月 生育地 草原 産地 雷山、天山

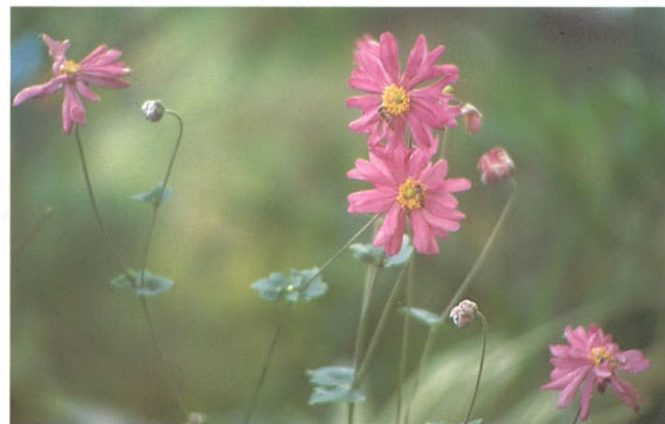
レイジンソウ (キンポウゲ科)



1989・10・23 厳木町

花期 9～10月 生育地 山地 産地 雷山、天山、多良岳等にやや稀

シュウメイギク (キンポウゲ科)



1987. 10. 20 多久市

花期 10月 生育地 林縁 産地 各地散在、中国原産

シチメンソウ (アカザ科)

シチメンソウは、1本2本と見るよりも、干潟一面を紅紫色に染めた群落を眺めるのがよい。生育環境が満潮時に潮をかぶり、干潮時には干潟になる場所で風波、潮流が少ないところに限られるので大きな群落は少ない。有明海は生きているので生育好適環境は移動する。消滅したり新発生したりするわけだが、有明海でも、六角川から筑後川の間には分布が限られているのはなぜだろうか。いつまでも秋の干潟に彩りをそえて欲しいと思う。名前は七面鳥のように色変わりする意。  
**花期** 9～10月 **生育地** 潟地 **産地** 有明海側に局在  
**類似種** ヒロハマツナ



1984. 11. 4 川副町



1988. 11 福富町

ヒロハマツナ (アカザ科)

**花期** 10～11月 **生育地** 海岸潟地 **産地** 有明海側に散在

マツナ (アカザ科)

**花期** 8～10月 **生育地** 海岸砂地 **産地** 玄海沿岸に稀



1989. 7. 30 鎮西町



1989. 10. 1 伊万里市

### アリタソウ (アカザ科)

葉とも花ともつかぬ、小さな緑色のかたまりからなっている。とはいえ、ケアリタソウ、アメリカアリタソウの類似種がある。全体に異臭がある。この成分に駆虫作用があり、駆虫剤として江戸時代に導入されたが、今ではこれと無関係に帰化している。原産地のメキシコでは、豆料理に欠かせぬハーブだという。名前の由来について牧野図鑑に、たぶん往時初めて肥前有田に作られていたことから名付けられたのではないだろうかと記している。天正年間か寛永の初年に渡来したというが、証明する資料がないだろうか。花期 8～10月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在、南米原産

### シロザ (アカザ科)



1988・10・23 多久市

花期 8～10月 生育地 原野、路傍 産地 各地

### ホソバナハマアカザ (アカザ科)



1989・10・1 伊万里市

花期 8～11月 生育地 海岸 産地 海岸に散在



イヌタデ (タデ科)



1984. 10. 23 小城町

稲刈りが終わった後の畦道に、<sup>あぜみち</sup>円い<sup>まる</sup>筵<sup>むしろ</sup>を敷いたように、紅紫色の花がおおっているのが見られる。イヌタデである。もともと、節から根を出して広がるので伏せたようになるのも不思議ではない。ところが、畑地でみるイヌタデは、もっと立っている。花もアカノマンマと呼ばれるように、赤御飯をこぼしたようにはみえない。タデの仲間は似た種類が多い。イヌタデは名前からすると、どこにもあるタデという意味であろう。日本へは、農耕文化の導入にともなって渡来したと考えられている。花期 9~10月 生育地 原野、路傍 産地 各地 方言 オナゴタデ

オオイヌタデ (タデ科)



1985・10・18  
牛津町

花期 8~10月 生育地 原野 産地 各地

ハナタデ (タデ科)



1988・10・16  
春振山

花期 8~10月 生育地 林縁 産地 各地



1988. 10. 18 多久市

「タデ食う虫も好きずき」という諺ことわざがある。タデのように辛い植物を食べる変わった虫もいるのを、人にあてはめたわけである。タデが辛いというが、これは一般的ではなく、たまたまマタデとも呼ばれる本種が辛いだけである。刺身のつまにされるタデは、本種の栽培品ということになる。日本人は、香辛料に対して冷淡だといわれるが、どうしてどうして、ヤナギタデの葉を香辛料に使っているのは、日本人だけのようであり、そうしてみると意外に好き者がいたという証左であろう。花期 9~11月 生育地 湿地、水辺 産地 各地



1989. 10 小城市

ミズヒキは水引にちなむという。水引は細いこよりに糊のりをひいて乾かし固めたもの。紅白、金銀、黒(藍)を組み合わせる。その水引とミズヒキのどこが似ているのだろう。白花品(ギンミズヒキ)、紅白が交じるもの(ゴショミズヒキ)があるにはあるが、よくわからな

い。ただ、水引に似ていると言われれば、ああそうかとうなずきたくなるムードは持っている。そんなわけで、わが小庭に植えこんだら増えるわ増えるわ、そこら一面に広がったが引き抜くには勇気がいった。花期 9~10月 生育地 山林樹下 産地 各地散在

ミゾソバ (タデ科)



1989. 10. 23 神埼町

名前の通り溝に多く、時に全体を埋めつくす。茎が横にはい、節から根を出して広がる。茎と葉に刺があるが本種に似たママコノシリヌグイほど気にはならない。水路を防ぐので害草に違いないのだが、これを引き抜こうとすると底の土まで同時に持ち上がる。溝さらいの役も同時にできる。葉の形から方言ではウシノシチャー（牛の額）とかウシンツラ（牛の顔）とよばれるが、自分達の強力な助っ人の名前を冠しているところを見ると、全くの悪役とはみなしていなかったようだ。花も愛らしい。花期 10月 生育地 水辺 産地 各地 方言 ウシガシラ

ツルソバ (タデ科)



1989. 9. 27 加部島

そばをつくるソバは中央アジア原産で、古い時代に日本に渡来したとされるが、やせ地でもあまり手をかけずに比較的短期間で収穫できるので救荒作物として重宝されてきた。種子は黒色で3稜がある。この稜（岨）からソバという名がついたという。ツルソバの種子もソバと同じく黒色で3稜形である。ただし、長いつるをひいて繁茂する。牧野植物図鑑に、幼茎を子供が食べるとある。唐津地方では種子もヤマベントウと称して食べるところがある。弁当と呼ぶところが愉快ではないか。花期 9~10月 生育地 沿海地 産地 海岸地帯 方言 ユノミ

秋、学校の行き帰りに通る田んぼ道ぎわの溝に白い花が咲きこぼれていた。名前を調べようと、親に無心して買ってもらった牧野植物図鑑を見たが、これだと思われるのがなかった。ただ、サクラタデに一番近い種類であることはわかったが、サクラタデの花は紅色である点で異なった。紅色の花のタデは周囲にはなかったし、随分歯がゆい思いをしたものだ。後年、サクラタデと出合ったが、シロバナサクラタデよりはるかに分布が限られている。その分布地を調べてまわるようになったのは、花の美しさもさることながら、少年時代のわだかまりがそうさせたのだろうと考えている。花期 10月 生育地 水辺 産地 各地



1985. 9. 8 三日月町



アギナシ (オモダカ科)

1985. 8. 17 江北町

オモダカ科の植物は、池や沼の岸边や水田に生える。3枚の白色花弁をもつ花はいずれもよく似ているので葉で区別する。ウリカワは水田雑草で葉は線形。オモダカはやじり形。アギナシの葉もやじり形だが、より狭長。ヘラオモダカはへら葉というように。オモダカ (沢瀉) は今より親しみのある植物であったことは、これが図案化され、紋所や模様用に用いられ、焼物にもよく描かれていることからわかる。かつてそれほどまでに重用されたのが、今ではほとんど描かれない格差はどこから生まれたのだろうか。花期 8~9月 生育地 池のふち、水田 産地 各地やや稀



1989. 10. 6 小城町

限られた面積内で、どういう植物がどんな状態で生育しているかを知るために行うのが植生調査。標高の低い疎林で10m四方の調査枠を張ると、必ずといってよいほど出現するのがヤブランである。生育密度は低く、しかも日陰では生育がよくないため、そんなに生えているとは気付かない。林内では花が咲いているのもほとんどみない。それにもかかわらず満遍なく生育しているのは、小鳥が餌として食べた後、種子をばらまいているのだろうか。庭に植えると結構たくさんの果実をつけるものだ。花期 8月 生育地 樹林下 産地 各地



1985. 10. 6 大和町

花期 9~10月 生育地 原野 産地 各地



1989. 10 小城町

花期 9~11月 生育地 原野 産地 各地 散在

カゼクサ (イネ科)



1989. 9. 27 加部島

原野や路傍など、踏み固められたところに多い。山道でわだちを残して、自動車の底をこするように生えているのが、カゼクサかチカラシバだ。両者は穂がないと同種のようにみえる。子供のころ、葉を結び合い、人が足をとられて転ぶようにといたずらをした。「今年は台風が2回来るとカゼクサの言いよる」とカゼクサの葉をなでながら、古老が語るのを聞いた。葉身に節みみたいなのがあり、これは手でなぞるとわかり、この数で台風の襲来回数を予測するのは全国的ならわしのようなのである。花期 7～9月 生育地 土手、路傍、原野 産地 各地 方言 カゼクサ

チカラシバ (イネ科)



1984・10・23 小城町

花期 9～10月 生育地 原野、路傍 産地 各地 方言 ミチシバ

アゼガヤ (イネ科)



1984・9・30 佐賀市

花期 9～10月 生育地 水田、湿地 産地 各地

オガルガヤ (イネ科)



1990. 3 小城町

イネ科の草原も、秋が深まると緑色を失い枯草色に染まる。オガルガヤは他のイネ科植物と混生している。ただ、大草原には不向きなようで、草原の縁とか山道端など、人の目にふれやすいところにみられる。オガルガヤは、緑色よりも枯草色の特異な花序が秋の風趣をかきたててくれるように思う。カルカヤ (刈萱) というけれど、屋根ふき用には役立ちそうにはない。どこかで呼び名を間違えたのか。メガルガヤはオガルガヤに対比するもの。花期 10月 生育地 草原、路傍 産地 各地



1990. 3 小城町

メガルガヤ (イネ科)

花期 9~10月  
生育地 原野、林縁  
産地 各地

メリケンカルカヤ  
(イネ科)

花期 9~10月 生育地 原野、  
路傍 産地 各地散在、北米原産



1989. 10. 23 佐賀市

ギョウギシバ (イネ科)



1989・10・1 伊万里市

花期 7～10月 生育地 草原、路傍 産地 各地

ササガヤ (イネ科)



1989・10・23 七山村

花期 9～10月 生育地 林縁、原野 産地 各地

ヒメアシボソ (イネ科)



1988・10・9 小城市

花期 10月 生育地 畑地 産地 各地

アシカキ (イネ科)



1989・9・10 小城市

花期 9～10月 生育地 湿地 産地 各地



セイバンモロコシ (イネ科)



1989. 10・28 多久市

不思議に田畑が広がる道路傍に多い。それだけが背が高く、畑から抜け出したのではないかと思いたくなるような、不釣り合いな格好をしている。一見キビに似た草姿。周囲に競争相手となる雑草もなく抜きん出ている。かといって、ポツポツとかたまって生え、長く連なって生えることもない。地中海沿岸原産、日本では昭和18年に最初に気付かれた。名前に時代が反映されている。本来、ジョンソン・グラスと呼ばれる牧草であるが、時に家畜の中毒をおこすようで質のよいものではない。花期 8～11月 生育地 路傍、原野 産地 各地散在、地中海沿岸原産

ヒメアブラサスキ (イネ科)



1989・10・23 佐賀市

ヌメリグサ (イネ科)



1989・10・23 神埼町

花期 9～11月 生育地 草原 産地 各地

花期 9～10月 生育地 水田、溝 産地 各地



1985. 11. 3 富士町

ススキ (イネ科)

日本の原っぱには必ずススキがある。山にも一面のススキ草原がある。大株になるとごつく、葉で傷つけられるなど扱いやすい植物ではない。なのに、古来秋の七草の一つとして、また、月とおバナ（花穂のこと）の組み合わせなど日本人の心に訴えるものを持っている。そればかりではない。屋根ふきの原料とされ、カヤぶき屋根は長持ちした。牛馬の飼料にもされた。子供のころ、葉をち切って指に挟み、引っ張って押し出し遠方へ飛ばした。逆にしなければ手を切ることはなかった。日本と周辺の国に分布する。花期 9～10月 生育地 草原 産地 各地 方言 オトコガヤ

オギ (イネ科)



1986・11・2 神埼町

ダンチク (イネ科)



1985・11・17 玄海町

花期 10～11月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在

花期 9～11月 生育地 沿海地 産地 沿海地



1989. 10. 23 神埼町

コブナグサ (イネ科)

かつて、草木染めをしている人から、ハチジョウガリヤスという植物を教えて欲しいと頼まれた。八丈島名産の黄八丈は、この草で染めるのだという。調べてみると、コブナグサであることがわかった。コブナグサは、稲刈りが済んだ田の畦で紫褐色の穂をつけて叢生しているのがあれば、間違いなくこの草なので探しやすい。田畑が点在する山道の両側も格好の探し場所。これをいくらか採って持っていったら、後日これで染めたという端切れをいただいた。黄八丈を想像するしかない染まり具合だった。花期 10月 生育地 田畦、林縁、原野 産地 各地

チヂミザサ (イネ科)



1988・9・16 伊万里市

花期 8月~10月 生育地 木陰 産地 各地

ノガリヤス (イネ科)



1984・10・7 天山

花期 9月~10月 生育地 山野 産地 各地



1988. 10. 15 巖木町

### ツルヨシ (イネ科)

ヨシは、池沼の岸辺や河川下流の河辺の砂泥質土壤に好んで生育するのに対し、ツルヨシは、川の上流から中流にかけての砂質土地帯に分布する。湿地だけでなく、乾燥地にもよく生育する。露出した川石の上に蔓をのぼし、ひげ根でしっかり固定するので少々の洪水にもびくともしない。これは人様にとって、必ずしも好ましいことではなく、密生して流れを妨げるため、河川の役目が果たせないことになる。生態学的には、川原植物の先駆植物とされ、他の植物を保護し、腐植質をせきとめ、川原植物の群落形成を助けている。花期 9月 生育地 河川 産地 各地



1984. 10. 24 小城町

### ジュズダマ (イネ科)

川の土手でも、水際に近いところは、子供には危険地帯となっている。小川でも、手が届くか届かない位置にある植物に手を出すのは危険行為。ジュズダマはそんなところにある。光沢があって固く、緑、黒、灰白色と変化する果実。果実の中央にでている花柱を上手に引き抜いて糸を通すと数珠じゆずになったり、首飾りになったりする。そのまま布に包んでお手玉につくる。手ごろな重さになる。外側からもむと布をとおして果実が滑る感触を楽しめる。危険というお題目が、こんな植物との触れ合いを離してしまう。花期 9月 生育地 水辺 産地 各地 方言 ジューズノキ



1985. 9. 29 巖木町

秋の野の花は全体に派手なのは少ないように思う。カヤツリグサ科の植物となると、もともと花らしいものがないので、どの時期でも目をひかない。とはいえ、花がなくてもいい。すがた形がよければ愛培もされ、床の間にも飾られる。コマツカサスキは、あまり知られていないが、そんな類の植物ではないかと思う。瘦果が松かさ、全体がスキに似ているという意の名前だから、実物は見たことがなくてもイメージをふくらませることができる。もちろん、日本人特有の感覚的なとらえ方で。花期 9月 生育地 湿地 産地 県中部から東部にかけ散在



1989・10・1 伊万里市

花期 8月～10月 生育地 湿地 産地 各地散在



1989・10・1 伊万里市

花期 9月～10月 生育地 湿地 産地 各地散在



1985, 12, 8 武雄市

スゲの仲間は地味であり、変化に乏しく、素人目には種の区別が困難である。しかし、実際には種類が多く、多型であることが知られている。専門家でも敬遠したくなるというが、地方植物を調べている者としては、これらの大群を看過するわけにはいかない。目にふれるスゲ類を採集しては標本にする。そしてある程度集まったところで、種の同定を行う。結局は専門家に同定を依頼することになるのだが、ところが、ナキリスゲは秋から冬にかけて穂をつけるが、この時期には他に類品がないのですぐにわかる。花期 9~11月 生育地 疎林、路傍 産地 各地散在



1986, 12, 23 北波多村

別名リュウノヒゲとともに、葉の形状にちなむという（大蛇にひげがあるのか否かは問うまい）。グラウンドカバー用として植えられるが、ひげの大安売りというところか。この植物に対する関心は、葉よりもつるつる光る碧色球形の実にある。オジイサンノメンコンタンという方言の由来は、私にはわからない。ハズミダマはこの実を石などの上に投げると、はずむことから。野球など知らない時代の実投げ遊びだった。同じ性質を利用したのが、ジュノミ鉄砲だった。それにしても実をあつめるのが大変だった記憶がある。花期 7月 生育地 樹下 産地 各地散在 方言 ジュノヒゲ

# 科別分類索引

## 上巻

<b>キク科</b>		ホトケノザ	花期3—5月 ……18 <small>☆</small>
ハルノノゲシ	花期4—7月 ……4 <small>☆</small>	タツナミソウ	5月 ……19
オニノゲシ	4—7月 ……5	ツクシタツナミソウ	5—6月 ……19
シロバナタンポポ	3—4月 ……6	カキドオシ	4—5月 ……20
セイヨウタンポポ	4—6月 ……7	キランソウ	3—5月 ……73
コウゾリナ	4—7月 ……7	ウツボグサ	6—7月 ……74
コオニタビラコ	4—5月 ……8	オドリコソウ	5—6月 ……75
ヤブタビラコ	4—5月 ……9	トウバナ	7—8月 ……158
オニタビラコ	3—5月 ……9	イヌトウバナ	8月 ……159
イワニガナ	4—5月 ……10	ヤマトウバナ	8月 ……159
オオジシバリ	5—7月 ……11	<b>リンドウ科</b>	
ニガナ	4—5月 ……11	フデリンドウ	4月 ……21
ヨモギ	8—10月 ……12	<b>ムラサキ科</b>	
ヒメジョオン	5—8月 ……64	キウリグサ	3—4月 ……22
ノアザミ	5—7月 ……65	ハナイバナ	3—9月 ……23
ハハコグサ	4—5月 ……66	ミズタバコ	5—9月 ……23
チチコグサ	4—5月 ……67	ヤマルリソウ	4—5月 ……25
チチコグサモドキ	7—9月 ……67	<b>サクラソウ科</b>	
ベニバナボロギク	7—10月 ……148	ルリハコベ	4—5月 ……24
ダンドボロギク	8—10月 ……149	<b>セリ科</b>	
ノボロギク	4—9月 ……149	ヤブジラミ	4—5月 ……26
<b>アカネ科</b>		オヤブジラミ	5—6月 ……27
サツマイナモリ	3—4月 ……13	シャク	4—5月 ……27
ヤエムグラ	5—6月 ……70	セリ	7—8月 ……160
ヤマムグラ	5—6月 ……71	ミツバ	7—8月 ……161
クルマムグラ	5—6月 ……71	ハマボウフウ	6—8月 ……162
ヘクソカズラ	7—9月 ……152	チドメグサ	6—9月 ……163
<b>ゴマノハグサ科</b>		<b>スミレ科</b>	
オオイヌノフグリ	1—6月 ……14	スミレ	3—5月 ……28
イヌノフグリ	4月 ……15	エイザンスミレ	4月 ……29
フラサバソウ	3—4月 ……15	ニョイスミレ	4月 ……30
ムラサキサギゴケ	4—5月 ……16	ヒメミヤマスミレ	5—6月 ……30
トキワハゼ	4—11月 ……17	コスミレ	3—4月 ……31
マツバウンラン	4—5月 ……17	ノジスミレ	3—4月 ……31
キュウシュウコゴメグサ	7—8月 ……156	ヒメスミレ	3—4月 ……32
<b>シソ科</b>		アリアケスミレ	4月 ……32

ニオイタチツボスミレ	花期5月 ……33 <small>☆</small>	ウマノアシガタ	花期5—6月 ……95 <small>☆</small>
シコクスミレ	4月 ……33	キツネノボタン	4—6月 ……96
<b>トウダイグサ科</b>		<b>メギ科</b>	
ノウルシ	4月 ……34	バイカイカリソウ	4—5月 ……49
トウダイグサ	4—5月 ……35	<b>ナデシコ科</b>	
ナツトウダイ	4—5月 ……35	ハコベ	3—11月 ……50
ヤマアイ	5—6月 ……79	ウシハコベ	4—6月 ……51
<b>マメ科</b>		オランダミミナグサ	3—5月 ……51
レンゲソウ	4—5月 ……36	ミミナグサ	3—5月 ……52
ハマエンドウ	4—5月 ……37	ノミノフスマ	4月 ……53
カラスノエンドウ	4—5月 ……38	マンテマ	5—6月 ……97
スズメノエンドウ	3—5月 ……39	ツメクサ	4—6月 ……98
カスマグサ	4月 ……39	フジナデシコ	7—8月 ……177
ウマゴヤシ	4—5月 ……83	<b>イラクサ科</b>	
シロツメクサ	4—7月 ……84	ヒメウワバミソウ	4—5月 ……54
アカツメクサ	5—8月 ……85	カラムシ	7—9月 ……179
ミヤコグサ	7—10月 ……85	<b>イネ科</b>	
<b>ユキノシタ科</b>		ツクシスズメノカタビラ	3—5月 ……55
ヤマネコノメソウ	4月 ……40	カラスムギ	5—6月 ……122
ツクシネコノメソウ	4—5月 ……41	イヌムギ	4—6月 ……123
タチネコノメソウ	3—5月 ……41	スズメノチャヒキ	5—6月 ……123
チャルメルソウ	5月 ……88	チガヤ	5月 ……124
コチャルメルソウ	4月 ……89	スズメノテッポウ	4—5月 ……125
オオチャルメルソウ	5月 ……89	オニシバ	6月 ……126
<b>アブラナ科</b>		コバンソウ	5月 ……127
ナズナ	3—5月 ……42	ヒメコバンソウ	5—6月 ……128
ハマハタザオ	4—6月 ……43	カニツリグサ	5—6月 ……129
タネツケバナ	3—5月 ……44	オニウシノケグサ	5—6月 ……130
イヌガラシ	6—7月 ……45	ネズミムギ	5—6月 ……131
スズシロソウ	4月 ……45	ナギナタガヤ	5—6月 ……131
ワサビ	5月 ……92	カモジグサ	5月 ……132
ユリワサビ	4—5月 ……93	アオカモジグサ	5—6月 ……133
マルバコンロンソウ	4—5月 ……93	ヤマカモジグサ	6—7月 ……133
オランダガラシ	6月 ……94	カモガヤ	5—6月 ……196
<b>ケシ科</b>		シラゲガヤ	6—7月 ……197
ムラサキケマン	3—6月 ……46	チゴザサ	6—7月 ……197
ツクシケマン	4—5月 ……47	イヌビエ	6—9月 ……198
ホザキケマン	4月 ……47	ケイヌビエ	7—8月 ……199
<b>キンポウゲ科</b>		タイヌビエ	7—8月 ……199
オキナグサ	4—5月 ……48	エノコログサ	6—7月 ……200

キンエノコロ	花期7月……201 <sup>ダ</sup>
ハマエノコロ	7-8月……201
シマスズメノヒエ	7-8月……202
<b>ユリ科</b>	
ツクシショウウジョウバカマ	4月……56
ホソバナコバイモ	3-4月……57
ハマタマボウキ	5月……108
ノビル	4-6月……109
シライトソウ	5-6月……110
オオバギボウシ	6-7月……111
ナルコユリ	5-6月……112
アマドコロ	5月……113
ホウチャクソウ	5月……113
オニユリ	7月……184
コオニユリ	7-8月……185
タカサゴユリ	8月……185
ヤブカンゾウ	7月……186
ユウスゲ	7-8月……187
ウバユリ	7月……188
<b>ヒガンバナ科</b>	
スイセン	1-3月……58
ハマオモト	7-8月……182
サフランモドキ	6月、9月……183
<b>アヤメ科</b>	
シャガ	4-5月……59
エヒメアヤメ	4月……60
ノハナショウブ	5-6月……106
ニワゼキショウ	5-6月……107
<b>キキョウ科</b>	
ヒナギキョウ	6-10月……68
キキョウソウ	5-6月……69
ホタルブクロ	5-6月……69
<b>オミナエシ科</b>	
カノコソウ	6月……72
<b>ヒルガオ科</b>	
ハマヒルガオ	5-6月……76
ヒルガオ	7-9月……157
<b>ウコギ科</b>	
ウド	7-8月……77
チクセツニンジン	6-7月……78

<b>ヒメハギ科</b>	
ヒメハギ	花期5-6月……80 <sup>ダ</sup>
<b>フウロソウ科</b>	
アメリカフウロ	5-6月……81
ゲンノショウコ	7-10月……164
<b>カタバミ科</b>	
ムラサキカタバミ	6-8月……82
カタバミ	5-10月……168
<b>バラ科</b>	
ヘビイチゴ	4-6月……86
オヘビイチゴ	5月……87
ヤブヘビイチゴ	6月……87
<b>ベンケイソウ科</b>	
コモチマンネングサ	5-6月……90
ヒメレンゲ	5月……91
ウンゼンマンネングサ	7-8月……91
<b>ツルナ科</b>	
ツルナ	4-11月……99
<b>センリョウ科</b>	
ヒトリシズカ	5月……100
フタリシズカ	4-5月……101
<b>タデ科</b>	
スイバ	5-6月……102
ヒメスイバ	4-5月……103
ギシギシ	5月……103
イタドリ	7月……178
<b>ウマノスズクサ科</b>	
アケボノアオイ	5月……104
サンヨウアオイ	4-5月……105
ツクシアオイ	4月……105
<b>サトイモ科</b>	
ショウブ	5-6月……114
マムシグサ	5月……116
ムサシアブミ	4-5月……117
ツクシマムシグサ	5月……118
ナンゴクウラシマソウ	4-5月……118
ヒメテンナンショウ	5月……119
オオハンゲ	5-6月……119
<b>カヤツリグサ科</b>	
アオスゲ	4-5月……120

ゴウソ	花期4-5月……121 <sup>ダ</sup>
アオゴウソ	5月……121
コウボウムギ	7月……194
ハマスゲ	7-8月……195
<b>イグサ科</b>	
スズメノヤリ	4-5月……134
ヤマスズメノヒエ	4-5月……135
ヌカボシソウ	4-6月……135
イ	7-8月……192
ホソイ	7-8月……193
コウガイゼキショウ	6-8月……193
<b>ラン科</b>	
セッコク	5月……136
ナゴラン	6-7月……137
フウラン	7月……137
シュンラン	4-5月……138
ガンゼキラン	5-6月……139
コケイラン	5月……139
エビネ	5月……140
キエビネ	5月……141
クリシマエビネ	5月……141
タカネ	……142
ヒゼン	……142
ヒゴ	……143
サツマ	……143
キンラン	5月……144
クロカミラン	6-7月……206
ウチョウラン	6-7月……207
ボウラン	6月……207
カキラン	7月……208
ネジバナ	7月……209
トキソウ	6月……210
<b>ウリ科</b>	
カラスウリ	7-8月……150
モミジカラスウリ	7-8月……151
キカラスウリ	7-8月……151
<b>ガガイモ科</b>	
ガガイモ	7-8月……153
<b>オオバコ科</b>	
オオバコ	5-6月……154

ツボミオオバコ	花期5-7月……155 <sup>ダ</sup>
ヘラオオバコ	7-9月……155
<b>アオイ科</b>	
イチビ	7-8月……165
<b>アカバナ科</b>	
マツヨイグサ	7月……166
オオマツヨイグサ	7-8月……167
アレチマツヨイグサ	8-9月……167
<b>モウセンゴケ科</b>	
モウセンゴケ	7-8月……169
<b>タヌキモ科</b>	
タヌキモ	7-8月……170
<b>スイレン科</b>	
ヒツジグサ	7-8月……171
<b>ドクダミ科</b>	
ドクダミ	6-8月……172
ハンゲショウ	7-8月……173
<b>ミソハギ科</b>	
ミソハギ	7-8月……174
<b>スベリヒユ科</b>	
スベリヒユ	6-9月……175
<b>ヤマゴボウ科</b>	
ヨウシュヤマゴボウ	7-9月……176
<b>ヒユ科</b>	
イヌビユ	7-10月……180
ホナガイヌビユ	7-9月……181
ホソバツルノゲイトウ	7-10月……181
<b>ツユクサ科</b>	
ヤブミョウガ	7-8月……189
ツユクサ	7-10月……190
イボクサ	8-9月……191
マルバツユクサ	7-10月……191
<b>ショウガ科</b>	
ハナミョウガ	5-6月……115
アオノクマタケラン	7月……203
<b>ガマ科</b>	
ガマ	7-8月……204
コガマ	7-8月……205
ヒメガマ	7月……205



# 科別分類索引

## 下巻

<b>キク科</b>	ヤマジノギク	花期	10月……136 <sup>♂</sup>
ヒメムカシヨモギ	花	8—10月……4 <sup>♂</sup>	
オオアレチノギク	8—10月……5		
アレチノギク	4—9月……5		
イヌキクイモ	9—10月……54		
オタカラコウ	8—10月……55		
ネコノシタ	7—10月……55		
ツクシアザミ	9—10月……56		
ヒメアザミ	9—10月……57		
ヤナギアザミ	8—10月……57		
カワラヨモギ	8—9月……58		
ヒメヨモギ	8—10月……59		
オトコヨモギ	9—10月……59		
ヒヨドリバナ	8—10月……60		
サワヒヨドリ	8—10月……61		
ツクシコウモリソウ	8—10月……61		
ホウキギク	9月……62		
アキノノゲシ	8—10月……63		
タカサブロウ	8—9月……63		
ブタクサ	9月……64		
アキノキリンソウ	10月……65		
オオオナモミ	9—10月……66		
オナモミ	8—10月……67		
ツクシメナモミ	8—10月……67		
ヤクシソウ	9—10月……128		
ホソバワダン	10—12月……129		
キッコウハグマ	9—10月……129		
センダングサ	9月……130		
シロノセンダングサ	10月……131		
アメリカセンダングサ	9—10月……131		
セイトカアワダチソウ	10—11月……132		
トキンソウ	8—10月……133		
シュウブソウ	8—10月……133		
ヨメナ	9—10月……134		
オオバヨメナ	8—10月……135		
ヤマシロギク	9—11月……135		
	クマノギク	10—11月……137	
	ハマベノギク	8—11月……137	
	シラヤマギク	8—11月……138	
	ホソバオグルマ	9—10月……138	
	ホソバコンギク	9—10月……139	
	ノコンギク	9—11月……139	
	ダルマガク	11月……140	
	ウラギク	9—11月……141	
	フクト	9—11月……141	
	シマカンギク	11月……142	
	キクタニギク	10—11月……143	
	ツワブキ	10月……144	
	<b>キキョウ科</b>		
	キキョウ	8—9月……6	
	サワギキョウ	9月……68	
	サイヨウシャジン	9月……145	
	ツルニンジン	8—9月……146	
	<b>タヌキモ科</b>		
	ホザキノミミカキグサ	8月……8	
	ミミカキグサ	8月……9	
	ムラサキミミカキグサ	8—9月……9	
	<b>イワタバコ科</b>		
	イワタバコ	8月……7	
	<b>シソ科</b>		
	クルマバナ	8月……10	
	ニガクサ	7—9月……11	
	カワミドリ	8月……11	
	アキチヨウジ	9月……82	
	キバナアキギリ	9—10月……83	
	キセワタ	8—10月……83	
	ヤマハッカ	10月……84	
	ヒメジソ	9—10月……85	
	アキノタムラソウ	7—11月……85	
	ヒキオコシ	9—10月……151	
	<b>ヒルガオ科</b>		

ネナシカズラ	花期	8—9月……12 <sup>♂</sup>	マツナ	花期	8—10月……169 <sup>♂</sup>
ハマネナシカズラ	8月……13		アリタソウ	8—10月……170	
アメリカネナシカズラ	7—9月……13		シロザ	8—10月……171	
マルバルコウ	9—10月……14		ホソバノハマアカザ	8—11月……171	
マルバアサガオ	9月……15		<b>ブドウ科</b>		
アメリカアサガオ	9月……15		ヤブガラシ	8月……29	
<b>セリ科</b>			ノブドウ	8月……148	
ドクゼリ	8—9月……16		<b>ウマノスズクサ科</b>		
ツクシトウキ	7—8月……17		ウマノスズクサ	7—8月……30	
マツバゼリ	7—9月……17		<b>トチカガミ科</b>		
ノダゲ	8—10月……86		トチカガミ	8—10月……31	
ハマゼリ	9—10月……87		<b>ヤマノイモ科</b>		
シラネセンキュウ	8—10月……87		ヤマノイモ	8—9月……32	
<b>オトギリソウ科</b>			カエデドコロ	8月……33	
オトギリソウ	8—9月……18		オニドコロ	7—8月……33	
ヒメオトギリ	8—10月……19		<b>ヒガンバナ科</b>		
アゼオトギリ	7—9月……19		オオキツネノカミソリ	8月……34	
<b>サクラソウ科</b>			<b>ユリ科</b>		
オカトラノオ	8月……20		シュロソウ	8—9月……35	
<b>バラ科</b>			ヤマホトトギス	8—9月……36	
キンミズヒキ	8—9月……21		ノカンゾウ	8月……37	
ワレモコウ	9—10月……162		コバギボウシ	8月……37	
ナガボノシロワレモコウ	9—10月……163		ヤブラン	8月……180	
ナガボノアカワレモコウ	9—10月……163		ツルボ	9—10月……181	
			ヤマラッキョウ	9—11月……181	
			ジャノヒゲ	7月……199	
<b>トウダイグサ科</b>			<b>ウキクサ科</b>		
ニシキソウ	8—9月……22		ウキクサ	8月……38	
コニシキソウ	7—9月……23		アオウキクサ	8—9月……39	
オオニシキソウ	7—9月……23		<b>アリノトウグサ科</b>		
コミカンソウ	9月……24		フサモ	8月……39	
ヒメミカンソウ	8—9月……25		<b>カヤツリグサ科</b>		
エノキグサ	9月……25		カヤツリグサ	9月……40	
<b>ナデシコ科</b>			コゴメガヤツリ	8—9月……41	
フシグロセンノウ	9月……26		クガガヤツリ	7—8月……41	
カワラナデシコ	8月……27		ヒデリコ	9月……42	
<b>アカザ科</b>			ホタルイ	8—9月……43	
オカヒジキ	8—9月……28		ヤマイ	8—10月……43	
シチメンソウ	9—10月……168		ヒメクグ	9月……44	
ヒロハマツナ	10—11月……169		タマガヤツリ	8—10月……45	

カンガレイ	花期 8—10月 ……45	シュスラン	花期 8—9月 ……49	テリハアカショウマ	花期 8—9月 ……91	オオケタデ	花期 8—9月 ……112
コマツカサススキ	9月 ……196	ミヤマウズラ	8—9月 ……49	ダイモンジソウ	10月 ……164	イシミカワ	9—10月 ……112
カワラスガナ	8—10月 ……197	<b>ミズアオイ科</b>		ウメバチソウ	9月 ……165	ボントクタデ	9—10月 ……113
アゼガヤツリ	9—10月 ……197	ホテイアオイ	8—9月 ……50	<b>アカバナ科</b>		ホソバノウナギツカミ	8—10月 ……113
ナキリスゲ	9—11月 ……198	コナギ	9月 ……124	ヒシ	7—8月 ……92	イヌタデ	9—10月 ……172
<b>イネ科</b>		<b>マツムシソウ科</b>		アカバナ	9月 ……102	オオイヌタデ	8—10月 ……173
キシウスズメノヒエ	8—10月 ……46	マツムシソウ	8—9月 ……69	ミズタマソウ	8—9月 ……103	ハナタデ	8—10月 ……173
ナルコヒエ	8—10月 ……47	<b>オミナエシ科</b>		チョウジタデ	8—10月 ……103	ヤナギタデ	9—11月 ……174
スズメノヒエ	8—10月 ……47	オミナエシ	9月 ……70	<b>スイレン科</b>		ミズヒキ	9—10月 ……175
メヒシバ	8月 ……118	オトコエシ	9月 ……71	オニバス	8—9月 ……93	ミゾソバ	10月 ……176
コメヒシバ	8—10月 ……119	<b>アカネ科</b>		マメ科		ツルソバ	9—10月 ……177
オヒシバ	8—10月 ……119	アカネ	9—10月 ……72	メドハギ	9—10月 ……94	シロバナサクラタデ	10月 ……178
トグシバ	8—10月 ……120	クルマバアカネ	8—10月 ……73	ヤハズソウ	8—10月 ……95	<b>イラクサ科</b>	
マコモ	8—9月 ……121	キバナカワラマツバ	8—9月 ……73	ネコハギ	8—9月 ……95	アオミズ	8—9月 ……114
トキワススキ	8—9月 ……122	<b>ナス科</b>		カワラケツメイ	8—10月 ……96	オニヤブマオ	8—10月 ……115
アブラススキ	9—10月 ……123	テリミノイヌホオズキ	9—10月 ……74	クサネム	8—10月 ……97	ヤブマオ	8—9月 ……115
モロコシガヤ	8—10月 ……123	ワルナスビ	8—10月 ……75	ヌスビトハギ	8—9月 ……97	<b>クワ科</b>	
カゼクサ	7—9月 ……182	ハダカホオズキ	8—10月 ……75	クズ	9—10月 ……98	カナムグラ	9月 ……116
チカラシバ	9—10月 ……183	ヒヨドリジョウゴ	9—10月 ……147	ヒメクズ	8—9月 ……99	<b>ヒガンバナ科</b>	
アゼガヤ	9—10月 ……183	<b>キツネノマゴ科</b>		タヌキマメ	8—9月 ……99	ヒガンバナ	9月 ……117
オガルガヤ	10月 ……184	キツネノマゴ	8—10月 ……76	タンキリマメ	8月 ……100	<b>ウリ科</b>	
メガルガヤ	9—10月 ……185	ハグロソウ	8—10月 ……77	ノササゲ	9—10月 ……101	アマチャヅル	9月 ……149
メリケンカルカヤ	9—10月 ……185	スズムシバナ	9月 ……77	ヤブマメ	9—10月 ……101	<b>ゴマ科</b>	
ギョウギシバ	7—10月 ……186	<b>ゴマノハグサ科</b>		<b>キンボウゲ科</b>		ヒシモドキ	8月 ……150
ササガヤ	9—10月 ……186	ツシマママコナ	9月 ……78	アキカラマツ	8—10月 ……104	<b>リンドウ科</b>	
ヒメアシボソ	10月 ……187	ママコナ	9—10月 ……79	シギンカラマツ	8—9月 ……105	リンドウ	10月 ……154
アシカキ	9—10月 ……187	ミヤマママコナ	8—9月 ……79	サラシナショウマ	9—10月 ……105	ツルリンドウ	9—10月 ……155
セイバンモロコシ	8—11月 ……188	ヒキヨモギ	8—9月 ……80	センニンソウ	8—9月 ……106	センブリ	9—10月 ……156
ヒメアブラススキ	9—11月 ……189	ヒナノウスツボ	8—9月 ……81	ボタンヅル	8—9月 ……107	ムラサキセンブリ	9—11月 ……157
ヌメリグサ	9—10月 ……189	コシオガマ	9—10月 ……81	コバノボタンヅル	8—10月 ……107	アケボノソウ	9—11月 ……157
ススキ	9—10月 ……190	スズメノトウガラシ	9月 ……152	タンナトリカブト	10月 ……166	<b>ミソハギ科</b>	
オギ	10—11月 ……191	アゼトウガラシ	9—10月 ……153	レイジンソウ	9—10月 ……167	ヒメミソハギ	9月 ……158
ダンチク	9—11月 ……191	ウリクサ	8—10月 ……153	シュウメイギク	10月 ……167	キカシグサ	9—10月 ……159
コブナグサ	10月 ……192	<b>ハマウツボ科</b>		<b>ザクロソウ科</b>		ミズマツバ	8—10月 ……159
チヂミザサ	8—10月 ……193	ナンバンギセル	9—10月 ……88	ザクロソウ	8—10月 ……108	<b>ツツラフジ科</b>	
ノガリヤス	9—10月 ……193	<b>イチヤクソウ科</b>		<b>ヒユ科</b>		アオツツラフジ	8月 ……160
ツルヨシ	9月 ……194	ギンリョウソウ	5—9月 ……89	ヒナタイノコズチ	8—9月 ……109	<b>ツリフネソウ科</b>	
ジュズダマ	9月 ……195	<b>シナノキ科</b>		ノゲイトウ	9月 ……110	ツリフネソウ	9月 ……161
<b>ラン科</b>		カラスノゴマ	9—10月 ……90	<b>タデ科</b>		<b>オモダカ科</b>	
サギソウ	8月 ……48	<b>ユキノシタ科</b>		ママコノシリヌグイ	9月 ……111	アギナシ	8—9月 ……179

# 50音順索引

注 ● < > 内数字は上巻掲載ページ  
●色数字は詳細ページ

## ア

アオウキクサ	39
アオカモジグサ	<133>
アオゴウソ	<121>
アオスゲ	<120>
アオツツラフジ	160
アオノクマタケラン	<203>
アオミズ	114
アオヤー	39
アカツメクサ	<85>
アカネ	72
アカノマンマ	172
アカバナ	102
アキカラマツ	104
アキチョウジ	82
アキノキリンソウ	65
アキノタムラソウ	85
アキノノゲシ	<4>
アキノノゲシ	63
アギナシ	179
アケボノアオイ	<104>
アケボノソウ	157
アサガオ	<157>
アザミ	<65>
アザミ	56
アシカキ	187
アスバラガス	<108>
アゼオトギリ	19
アゼガヤ	183

アゼガヤツリ	197
アゼトウガラシ	153
アブラススキ	123
アマチャヅル	149
アマドコロ	<113>
アマネ	<124>
アメリカアサガオ	15
アメリカアリタソウ	170
アメリカスズメノヒエ	<202>
アメリカスズメノヒエ	46
アメリカセンダングサ	131
アメリカネナシカズラ	13
アメリカフウロ	<81>
アリアケスミレ	<32>
アリタソウ	170
アレチノギク	5
アレチマツヨイグサ	<166, 167>
アワコガネギク	143
アワゴメバナ	70
アワダチソウ	65
アワバナ	70

## イ

イ	<192>
イオツラ	<157>
イシミカワ	112
イシャタオシ	<73>
イソエンドー	<37>
イソナデシコ	<177>
イタドリ	<178>

イタリアンライグラス	<130>
イチビ	<165>
イッコッコ	<200>
イトカズラ	160
イヌガネブ	148
イヌガラシ	<45>
イヌキクイモ	54
イヌコロコロ	<200>
イヌセンブリ	156
イヌタデ	172
イヌトウバナ	<159>
イヌノフグリ	<15>
イヌビエ	<198>
イヌビユ	<180>
イヌホオズキ	74
イヌムギ	<123>
イネ	<198>
イノコズチ	109
イボクサ	<191>
イラクサ	<73>
イリオモテニシキソウ	22
イワギク	140
イワタバコ	7
イワチシャ	7
イワニガナ	<10>
インコーコー	<200>
インコログサ	<200>
インヅワ	144
インビチョイ	161
インボロジョ	<200>
インボイボイ	<200>

## ウ

ウイキョウ	<78>
ウオタア・ヒアシンス	50
ウキクサ	38

ウシガシラ	176
ウシノシチャー	176
ウシハコベ	<51>
ウシンツラ	176
ウチョウラン	<207>
ウツボグサ	<74>
ウド	<77>
ウバユリ	<188>
ウマゴヤシ	<83>
ウマゼー	<95, 96>
ウマノアシガタ	<95>
ウマノガネビ	148
ウマノスズクサ	30
ウメバチソウ	165
ウラギク	141
ウリカワ	179
ウリクサ	153
ウワバミソウ	<54>
ウワバミソウ	114
ウンゼンマンネングサ	<91>

## エ

エイザンスミレ	<29>
エー	38
エノキグサ	25
エノコログサ	<200>
エヒメアヤメ	<49, 60>
エビスグサ	96
エビネ	<140>
エンドウ	<37>
エンメイソウ(延命草)	151

## オ

オーチャードグラス	<196>
オートムギ	<122>

オオアレチノギク ..... 5  
 オオアワガエリ..... <130, 196>  
 オオアワダチソウ..... 65  
 オオイヌタデ ..... 173  
 オオイヌノフグリ..... <14>  
 オオオナモミ..... 66  
 オオカナダモ..... 31  
 オオキツネノカミソリ..... 34  
 オオケタデ ..... 112  
 オオジシバリ..... <11>  
 オオチャルメルソウ..... <88, 89>  
 オオニシキソウ..... 23  
 オオハンゲ ..... <119>  
 オオバギボウシ ..... <111>  
 オオバコ ..... <154>  
 オオバヨメナ ..... 135  
 オオフサモ ..... 31  
 オオブタクサ..... 64  
 オオマツヨイグサ..... <166, 167>  
 オオミズゴケ ..... <106>  
 オオユウガギク ..... 134  
 オカジシャ ..... <99>  
 オカトラノオ..... 20  
 オカヒジキ..... 28  
 オガルガヤ ..... 184  
 オギ ..... 191  
 オキナグサ..... <48>  
 オケラ ..... 145  
 オコトシ ..... 118  
 オジイサンノメンコンタン ..... 199  
 オタカラコウ..... 55  
 オトギリソウ..... 18  
 オトコエシ..... 71  
 オトコオミナエシ..... 71  
 オトコガヤ ..... 190  
 オトコヨモギ..... 59  
 オドリコソウ..... <75>

オナゴガヤ ..... <124>  
 オナゴタデ ..... 172  
 オナモミ..... 67  
 オニウシノケグサ ..... <130>  
 オニシバ ..... <126>  
 オニタヒラコ ..... <9>  
 オニドコロ..... 33  
 オニノゲシ ..... <5>  
 オニバス..... 93  
 オニヤブマオ ..... 115  
 オニユリ ..... <184>  
 オバコ ..... <154>  
 オバナ ..... 190  
 オヒシバ ..... 119  
 オヘビイチゴ..... <87>  
 オミナエシ..... 70  
 オミナメシ..... 70  
 オモイグサ..... 88  
 オモダカ ..... 179  
 オヤブジラミ..... <27>  
 オランダガラシ..... <94>  
 オランダキジカクシ ..... <108>  
 オランダセキチク ..... <177>  
 オランダミミナグサ..... <51, 52>  
 オンナメシ..... 70

カ

カエデドコロ..... 33  
 カキドオシ..... <20>  
 カキラン ..... <208>  
 カコソウ..... <74>  
 カゴソ..... <74>  
 カサスゲ ..... <120>  
 カスマグサ..... <39>  
 カスミソウ ..... <177>  
 カズラゴシ ..... <132>

カゼクサ ..... 182  
 カタバミ ..... <168>  
 カナダアキノキリンソウ..... 65  
 カナムグラ ..... 116  
 カニツリグサ ..... <129>  
 カネコシダ ..... <206>  
 ガネビ ..... 148  
 ガネブ ..... 148  
 カノコソウ..... <72>  
 カモガヤ ..... <196>  
 カモジグサ ..... <132>  
 カヤ ..... <114>  
 カヤツイグサ..... 40  
 カヤツリグサ..... 40  
 カラスウリ ..... <150>  
 カラスノエンドウ..... <38>  
 カラスノカンマクラ ..... <153>  
 カラスノゴマ..... 90  
 カラスムギ ..... <122>  
 カラムシ ..... <179>  
 カルカヤ ..... 184  
 カワミドリ..... 11  
 カワラケツメイ..... 96  
 カワラスガナ ..... 197  
 カワラナデシコ..... 27  
 カワラヨモギ..... 58  
 カンアオイ類 ..... <104>  
 カンガレイ..... 45  
 カンザシギボウシ ..... <111>  
 カントリソウ..... <20>  
 カンネカズラ..... 98  
 ガガイモ ..... <153>  
 ガマ ..... <204>  
 ガメンシュブタケ..... 31  
 ガラガラ..... <42>  
 ガンゼキラン ..... <139>  
 ガンピ ..... <177>

キ

キウリグサ..... <22>  
 キエビネ ..... <141>  
 キカシグサ ..... 159  
 キカラスウリ..... <150, 151>  
 キキョウ ..... 6  
 キキョウソウ..... <69>  
 キクイモ..... 54  
 キクタニギク ..... 143  
 キシュウスズメノヒエ ..... <202>  
 キシュウスズメノヒエ..... 46  
 キジカクシ ..... <108>  
 キスゲ ..... <187>  
 キセワタ..... 83  
 キチギヤ ..... <26>  
 キチギヤ ..... 130  
 キッコウハグマ ..... 129  
 キッチグサ..... <75>  
 キツネノカミソリ..... 34  
 キツネノシッポ ..... <200>  
 キツネノボタン..... <96>  
 キツネノマゴ ..... <158>  
 キツネノマゴ..... 76  
 キバナアキギリ..... 83  
 キバナカワラマツバ..... 73  
 キビ ..... 188  
 キュウシュウコゴメグサ ..... <156>  
 キランソウ..... <73>  
 キリシマエビネ ..... <141>  
 キンエノコロ ..... <201>  
 キンボウゲ..... <95>  
 キンミズヒキ..... 21  
 キンラン ..... <144>  
 ギシギシ ..... <103>  
 ギボウシ ..... <111>

ギョウギシバ	186
ギンミズヒキ	175
ギンリョウソウ	89

ク

クグガヤツリ	41
クサアワ	<200>
クサスギカズラ	<108>
クサチャ	96
クサネム	97
クズ	98
クソカズラ	<152>
クチナワイチゴ	<86>
クマタケ	<203>
クルマバアカネ	73
クルマバナ	10
クルマムグラ	<71>
クレソン	<94>
クレマチス	106
クローバー	<84>
クロカミラン	<206>
クロユリ	<48>
クワモドキ	64
クンシヨグサ	<70>

ケ

ケアリタソウ	170
ケイトウ	110
ケイヌビエ	<199>
ケナシヒメムカシヨモギ	4
ケヤキ	<54>
ゲンノショウコ	<81, 164>

コ

コージブツ	<66>
コーブシ	<195>
コウガイゼキショウ	<193>
コウゾリナ	<7>
コウボウシバ	<194>
コウボウムギ	<194>
コオニタヒラコ	<8>
コオニユリ	<185>
コガネグサ	<168>
コガマ	<205>
コ克蘭	<73>
コケイラン	<139>
コケリンドウ	<21>
コゴメガヤツリ	41
コシオガマ	81
コスミレ	<31>
コチャルメルソウ	<88, 89>
コナギ	124
コナラ	<64>
コニシキソウ	23
コバギボウシ	<111>
コバギボウシ	37
コバノボタンヅル	107
コバンソウ	<127>
コヒゲ	<192>
コブナグサ	192
コマツカサススキ	196
コミカンソウ	24
コメヒシバ	119
コモ	121
コモチマンネングサ	<90>
ゴーリンゴーリン	<154>
ゴイシンソウ(御維新草)	4
ゴウソ	<121>

ゴギョウ	<8>
ゴショミズヒキ	175
ゴマ	90
ゴマノキ	63

サ

サイシン	<104>
サイヨウシャジン	145
サオトメバナ	<152>
サギゴケ	<16>
サギソウ	<187>
サギソウ	48
サクラタデ	178
ササガヤ	186
サツマ	<143>
サツマイナモリ	<13>
サフラン	<183>
サフランモドキ	<183>
サラシナショウマ	105
サルノタバコ	<134>
サワオトギリ	19
サワギキョウ	68
サワトウガラシ	152
サワヒヨドリ	61
サンガイグサ	<18>
サンシチソウ	<73>
サンヨウアオイ	<104, 105>
ザクロ	108
ザクロソウ	108
ザトクサ	<190>

シ

シーカンボ	<178>
シギンカラマツ	105
シカ	<77>

シコクスミレ	<33>
ジシバリ	<10>
シソバウリクサ	153
シチメンソウ	168
シデ	<188>
シノハ	<102>
シマカンギク	142
シマスズメノヒエ	<202>
シマスズメノヒエ	46
シマニシキソウ	22
シャガ	<59>
シャク	<27>
シャジン	145
シュウブンソウ	133
シュウメイギク	167
シュースングサ	<148>
シュスラン	49
シュロ	35
シュロソウ	35
シュンラン	<138>
ショウブ	<114>
シライトソウ	<110>
シラクサ	118
シラゲガヤ	<197>
シラネセンキュウ	87
シラヤマギク	138
シロザ	171
シロツメクサ	<84>
シロノセンダングサ	131
シロバナサクラタデ	178
シロバナタンポポ	<6>
シロバナマンテマ	<97>
シロンハ	<179>
ジジババ	<138>
ジネ	<122>
ジミ	<192>
ジミノキ	<192>

ジャノヒゲ	199
ジュズノキ	195
ジュノヒゲ	199
ジュズダマ	195
ジョンソン・グラス	188
ジンジソウ	164

ス

スイセン	<58>
スイバ	<102>
スゲ	<120>
スゲ	198
ススキ	<114>
ススキ	190
スズガラクサ	<128>
スズシロ	<8>
スズシロソウ	<45>
スズナ	<8>
スズムシバナ	77
スズメノエンドウ	<39>
スズメノチャヒキ	<123>
スズメノテッポウ	<125>
スズメノトウガラシ	152
スズメノヒエ	<202>
スズメノヒエ	47
スズメノヤリ	<134>
スズラン	<140>
スベリヒユ	<175>
スマレ	<28>
スモトイグサ	119
スモトリバナ	<28>
ズバナ	<124>

セ

セー	<160>
----	-------

セイトカアキノキリンソウ	65
セイトカアワダチソウ	132
セイバンモロコシ	188
セイヨウタンポポ	<7>
セッコク	<136>
セリ	<160>
センダングサ	130
センニンソウ	106
センファイ	156
センブリ	156
ゼンモン	109
ゼンモンネギ	<109>

ソ

ソーハギ	<174>
------	-------

タ

タイヌビエ	<199>
タイリンアオイ	<104>
タイワンモガラ	50
タカサゴユリ	<185>
タカサブロウ	63
タカネ	<142>
タキトバナ	<186>
タチネコノメソウ	<41>
タツナミソウ	<19>
タニガワコンギク	139
タヌキノシッポ	<200>
タヌキモ	<170>
タヌキマメ	99
タネツケバナ	<44>
タマガヤツリ	45
タラノキ	111
タワラムギ	<127>
タンキリマメ	100

タンナトリカブト	166
タンポコ	<6>
タンポポ	<4>
ダイモンジソウ(大文字草)	164
ダゴヤシ	<4>
ダリスグラス	<202>
ダルマガク	140
ダンチク	191
ダンドボロギク	<149>

チ

チカラシバ	183
チガヤ	<124>
チクセツニンジン	<78>
チゴザサ	<197>
チシャ	128
チチコグサ	<67>
チチコグサモドキ	<67>
チヂミザサ	193
チツチグサ	<34>
チドメグサ	<163>
チモシー	<130, 196>
チャンチャンハガマ	<104>
チャルメルソウ	<88>
チョウジ	82
チョウジタデ	103
チョウセンアサガオ	74
チョウセンニンジン	<78>
チョウセンニンジン	145, 146
チョウセンノギク	142
チンジブシ	97

ツ

ツキミソー	<166>
ツクシアオイ	<105>

ツクシアザミ	56
ツクシキケマン	<47>
ツクシコウモリソウ	61
ツクシショウジョウバカマ	<56>
ツクシズメノカタヒラ	<55>
ツクシタツナミソウ	<19>
ツクシトウキ	17
ツクシネコノメソウ	<41>
ツクシマムシグサ	<118>
ツクシメナモミ	67
ツケナ	<180>
ツシマママコナ	78
ツバ	144
ツバナ	<124>
ツバメ	<122, 124>
ツボミオオバコ	<155>
ツメクサ	<98>
ツユクサ	<190>
ツリガネニンジン	145
ツリフネソウ	161
ツルソバ	177
ツルナ	<99>
ツルニンジン	146
ツルボ	181
ツルヨシ	194
ツルリンドウ	155
ツワ	144
ツワブキ	<172>
ツワブキ	144

テ

テッセン	106
テツドウソウ(鉄道草)	4
テリハアカショウマ	91
テリミノイヌホオズキ	74
テンバス	93

## ト

トーボシ	4
トールフェスク	<130>
トウキ	<78>
トウシンソウ	<192>
トウダイグサ	<35>
トウバナ	<158>
トキシウ	<210>
トキワススキ	122
トキワハゼ	<17>
トキンソウ	133
トコロ	33
トダシバ	120
トチカガミ	31
トテッポウ	<190>
トトキ	145
トベラクサ	<163, 172>
トモエソウ	18
トーガメバス	31
ドクゼリ	16
ドクダミ	<172>
ドゼン	<77>
ドッチョイバナ	<28>

## ナ

ナガボノアカワレモコウ	163
ナガサキシヤジン	145
ナガボノシロワレモコウ	163
ナガミノオニシバ	<126>
ナキリスゲ	198
ナギ	124
ナギナタガヤ	<131>
ナゴラン	<137>
ナズナ	<42>

ナツトウダイ	<35>
ナデシコ	<177>
ナデシコ	27
ナルコユリ	<112>
ナルコヒエ	47
ナンゴクウラシマソウ	<118>
ナンバンギセル	88

## ニ

ニオイタチツボスミレ	<33>
ニガクサ	11
ニガナ	<11>
ニシキソウ	22
ニョイスミレ	<30>
ニワゼキショウ	<107>
ニワトコ	<73>
ニンジングサ	<26>

## ヌ

ヌカボシソウ	<135>
ヌスビトハギ	97
ヌスビトバナ	<48>
ヌメリグサ	189

## ネ

ネコエンドー	<38>
ネココンコン	<200>
ネコノシャミセン	<42>
ネコジャラシ	<200>
ネコノシタ	55
ネコノメソウ	<40>
ネコハギ	95
ネジバナ	<209>
ネズミムギ	<130, 131>

ネナシカズラ	12
ネブイグサ	97

## ノ

ノアザミ	<65>
ノアザミ	56
ノウルシ	<34>
ノエンドー	<38>
ノカンゾウ	37
ノガリヤス	193
ノギク	134
ノゲイトウ	110
ノコンギク	139
ノササゲ	101
ノジスミレ	<31>
ノダケ	86
ノハナショウブ	<106>
ノヒメユリ	<184>
ノビル	<109>
ノブドウ	148
ノボイグサ	<70>
ノボリグサ	<38>
ノボロギク	<149>
ノマメ	99
ノミノツヅリ	<53>
ノミノフスマ	<53>
ノンビー	<109>

## ハ

ハイカラグサ	<18>
ハイシマカンギク	142
ハギ	154
ハギナ	134
ハクイ	<138>
ハグロソウ	77

ハコベ	<50>
ハコベラ	<8>
ハシリドコロ	74
ハタザオ	<43>
ハダカホオズキ	75
ハチジョウススキ	122
ハチジョウガリヤス	192
ハナイバナ	<23>
ハナタデ	173
ハナミョウガ	<115>
ハハコグサ	<66>
ハマウツボ	58
ハマエノコロ	<201>
ハマエンドウ	<37>
ハマオモト	<182>
ハマスゲ	<195>
ハマゼリ	87
ハマナデシコ	<177>
ハマネナシカズラ	13
ハマハタザオ	<43>
ハマタマボウキ	<108>
ハマヒルガオ	<76>
ハマベノギク	137
ハマボウフウ	<162>
ハマユウ	<182>
ハマユリ	<182>
ハルオミナエシ	<72>
ハルノノゲシ	<4>
ハルリンドウ	<21>
ハンゲショウ	<173>
バイカイカリソウ	<49>
バシカン	<175>
バラ	<65>

## ヒ

ヒエ	<198>
----	-------

ヒガンバナ	117
ヒキオコシ	151
ヒキヨモギ	80
ヒゴ	<143>
ヒシ	92
ヒシモドキ	150
ヒジキ	28
ヒゼン	<142>
ヒツジグサ	<171>
ヒツジグサ	93
ヒデリコ	42
ヒトリシズカ	<100>
ヒナギキョウ	<68>
ヒナタイノコズチ	109
ヒナノウスツボ	81
ヒメアザミ	57
ヒメアシボソ	187
ヒメアブラサスキ	189
ヒメウワバミソウ	<54>
ヒメオトギリ	19
ヒメガマ	<205>
ヒメクグ	44
ヒメクズ	99
ヒメコバンソウ	<128>
ヒメジソ	85
ヒメジョオン	<64>
ヒメスイバ	<103>
ヒメスマレ	<32>
ヒメテンナンショウ	<119>
ヒメハギ	<80>
ヒメビシ	93
ヒメホタルイ	43
ヒメミカンソウ	25
ヒメミソハギ	158
ヒメミヤマスマレ	<30>
ヒメムカシヨモギ	4
ヒメヨモギ	59

ヒメレンゲ	<91>
ヒヨコグサ	<50>
ヒヨドリジョウゴ	147
ヒヨドリバナ	60
ヒルガオ	<157>
ヒロハノウシノケグサ	<130>
ヒロハホウキギク	62
ヒロハマツナ	169
ビルクサ	<163>
ピンボウカズラ	29
ビービーグサ	<38, 125>

フ

フーズキ	<140>
フーズ	<36>
フウラン	<137>
フウロソウ	<81>
フキ	<160>
フキエンゾー	<38>
フクト	141
フサモ	39
フジナデシコ	<177>
フジバカマ	60
フタリシズカ	<101>
フツ	<12, 114>
フデリンドウ	<21>
フラサバソウ	<15>
フロフキ	<104>
フロフシ	<104>
ブゼンノギク	137
ブタクサ	64

へ

ヘクソカズラ	<152>
ヘビイチゴ	<86>

ヘラオオバコ	<155>
ヘラオモダカ	179
ベニバナホロギク	<148>
ベレニアルライグラス	<130>

ホ

ホーソーバナ	<36>
ホウキギク	62
ホウセンカ	161
ホウチャクソウ	<113>
ホオズキ	<154>
ホザキケマン	<47>
ホザキノミミカキグサ	8
ホザキノフサモ	31
ホソイ	<193>
ホソバノウナギツカミ	113
ホソバオグルマ	138
ホソバコンギク	139
ホソバツルノゲイトウ	<181>
ホソバナコバイモ	<57>
ホソバノハマアカザ	171
ホソバワダン	129
ホソムギ	<130>
ホタルイ	43
ホタルグサ	<98>
ホタルブクロ	<69>
ホタンヅル	107
ホテイアオイ	50
ホトケノザ	<8, 18>
ホトトギス	36
ホナガイヌビユ	<181>
ホウラン	<207>
ホントクタデ	113

マ

マアザミ	56
マコモ	121
マスクサ	40
マタデ	174
マツナ	169
マツバゼリ	17
マツバウンラン	<17>
マツムシソウ	69
マツモト	<177>
マツヨイグサ	<166>
ママコナ	79
ママコノシリヌグイ	111
マムシグサ	<116>
マルバアサガオ	15
マルバコンロンソウ	<93>
マルバツユクサ	<191>
マルバルコウ	14
マンテマ	<97>

ミ

ミズオーバコ	37
ミズクサ	<190>
ミズタマソウ	103
ミズタビラコ	<23>
ミズバショウ	<116>
ミズヒキ	175
ミズマツバ	159
ミズラン	50
ミソハギ	<174>
ミゾソバ	176
ミチシバ	183
ミツバ	<82, 161>
ミツバゼー	<161>



ミミカキグサ ..... 9  
ミミナグサ ..... <52>  
ミヤコグサ ..... <85>  
ミヤマウズラ ..... 49  
ミヤマママコナ ..... 79  
ミョウガ ..... <189>

ム

ムサシアブミ ..... <117>  
ムラサキカタバミ ..... <82>  
ムラサキケマン ..... <46>  
ムラサキサギゴケ ..... <16>  
ムラサキセンブリ ..... 157  
ムラサキミミカキグサ ..... 9

メ

メイジソウ(明治草) ..... 4  
メガルガヤ ..... 185  
メドウフェスク ..... <130>  
メドハギ ..... 94  
メヒシバ ..... 118  
メリケンカルカヤ ..... 185  
メنزー ..... 94

モ

モウセンゴケ ..... <169>  
モチクサ ..... <12>  
モトジロ ..... 37  
モミジカラスウリ ..... <150, 151>  
モロコシガヤ ..... 123

ヤ

ヤー ..... 38, 39

ヤイトバナ ..... <152>  
ヤエムグラ ..... <38, 70>  
ヤエムグラ ..... 4, 116  
ヤオヤボウフウ ..... <162>  
ヤクシソウ ..... 128  
ヤコンクサ ..... <34>  
ヤコンシッポ ..... <200>  
ヤナギアザミ ..... 57  
ヤナギイノコズチ ..... 109  
ヤナギタテ ..... 174  
ヤハズエンドウ ..... <38>  
ヤハズソウ ..... 95  
ヤブカンゾウ ..... <186>  
ヤブガラシ ..... 29, 149  
ヤブジラミ ..... <26>  
ヤブタバコ ..... <9>  
ヤブヘビイチゴ ..... <87>  
ヤブマメ ..... 101  
ヤブマオ ..... 115  
ヤブミョウガ ..... <189>  
ヤマラッキョウ ..... 181  
ヤブラン ..... 180  
ヤマアイ ..... <79>  
ヤマイ ..... 43  
ヤマイモ ..... 32  
ヤマカモジグサ ..... <133>  
ヤマギク ..... 142  
ヤマゴボウ ..... <176>  
ヤマゴンニャク ..... <116>  
ヤマショウガ ..... <115>  
ヤマジノギク ..... 136  
ヤマシロギク ..... 135  
ヤマスズメノヒエ ..... <135>  
ヤマトウバナ ..... <159>  
ヤマトナデシコ ..... 27  
ヤマニンジン ..... <26>  
ヤマネコノメソウ ..... <40>

ヤマノイモ ..... 32  
ヤマハタザオ ..... <43>  
ヤマハッカ ..... 84  
ヤマホトトギス ..... 36  
ヤマムグラ ..... <71>  
ヤマユリ ..... <184>  
ヤマルリソウ ..... <25>

ユ

ユウスゲ ..... <187>  
ユウレイバナ ..... 89  
ユキノシタ ..... 164  
ユキモチソウ ..... <116>  
ユリ ..... <184>  
ユリワサビ ..... <93>

ヨ

ヨウシュヤマゴボウ ..... <176>  
ヨコツチバナ ..... <74>  
ヨシ ..... 194  
ヨメナ ..... 134  
ヨメノシリヌグイ ..... 111  
ヨモギ ..... <12, 114>  
ヨモギ ..... 58  
ヨルガオ ..... <157>

ラ

ラミー ..... <179>

リ

リュウノヒゲ ..... 199  
リンドウ ..... <21>  
リンドウ ..... 154

ル

ルリハコベ ..... <24>

レ

レイジンソウ ..... 167  
レンゲソウ ..... <36>

ワ

ワカタ ..... <111>  
ワサビ ..... <92>  
ワスレナグサ ..... <22>  
ワルナスビ ..... 75  
ワレモコウ ..... 162

## 著者略歴



さだまつ みつを  
貞松 光男

昭和11年3月鹿島市生まれ。鹿島高を経て東京農工大卒。農学博士。佐賀植物友の会幹事。現在は佐賀県上場営農センター所長。専門は植物病理。植物、園芸、農業関係の書籍、雑誌に多数執筆。自宅は小城郡小城町畑田2659-2

## 佐賀の野草 (下) 8～11月編

定価 2,600円  
(本体 2,524円)

平成2年11月15日発行

著者 貞松光男

発行 佐賀新聞社

〒840 佐賀市松原1-3-18  
TEL 0952-25-4828

印刷 佐賀印刷社

2-578

落丁・乱丁の本はお取り替えいたします



定価2,600円  
(本体2,524円)

ISBN4-88298-024-X C064 P2600E